

此を以て士族の家庭とは其の社會力に於て大に異なる所あり。近年に至る迄明かに之を認むるを得たりしが教育普及の結果一切平等に歸し而も平等に武士道を重んずることとなれり。即ち武士道は古代に於けるよりもより大なる社會力となれりといふべきのみ。

武士道は歐羅巴のナイトの如く寛仁の美德ありと雖も階級主義の時代に發達したるものなれば武士道其者としては階級的觀念を包含し、今日に適せざるものあり。故に武士道其儘として之を今日に用ふることなく、碎いて以て之を用ふれば精金美玉取るべきもの少しとなさず。兎に角武士道が人心を維持する一個の大なる社會力たることは言ふを須たざるなり。封建時代去りて後其の精華たる武士道の獨り活躍するは今日の社會が武士階級即ち往時の上流階級の專有物たりし武士道を共有せんとするものにして偶々以て今日社會のデモク

ラテイクなるを見るべきなり。而も今日の社會が突如として發達せるにあらず、封建時代精神の次第に汎濫したる状態なることも見るべきなり。

七 儒教

儒教は大體に於て既に過去のものとなれり。孔子の所説の如き善は即ち善なりと雖も何等今日の青年を司配するに足るものなし。此れに就いては余は嘗て「社會改造の理想」に於て論述せることあり。今再びせず。儒教は人間の實行個條なり。其の根本に横はる者は仁なり。儒教其者としては一貫する所ありと雖も恰も醱酵せざる麥酒の如く人を酔はしむるに足らざるなり。然れども儒教の中又往々にして今日の青年に適するものなきにあらず。孟子の如き人をして感奮興起せしむるに足るの言行少しとせず。且つ所謂論者なるものの中

には相當の識者學者あるがために今日に於ても兎に角一種の勢力として多少の影響を社會に與へつゝあることは否定す可らざるなり。

八 日本同化力

以上述べたる諸種の社會力は何れも以て日本の人心を團結する所以なり。而も日本に固有なるものゝみにはあらず。外國より入り來れるものも亦少からず。儒教の如き佛教の如き是れなり。此れ等は外國のものとは言ひながら何れも善く日本化せられたり。換言すれば日本の國體に由りて陶冶せられ、以て其の生存を維持しつゝあるなり。儒教と共に來れる文字及び道德仁義の名稱の如きは固より日本の國體に對して何等支障する所なけれども、孔孟革命の思想の如きは到底日本の國體と調和すべくもあらず。殊に孟子を甚しとなす。然れば勤王主義の極めて旺盛なりし水戸藩に於ては孟子を讀むこと

を禁ぜりとさへ稱せらる。即ち所謂學問の獨立は脅かされつゝありしなり。然れども孟子を讀ましめし所の他藩が必ずしも勤王心に於て缺如する所あるにはあらず。水戸藩の人士が今日に至る迄多く勤王的なるにもあらず。理論の上より言へば孟子は危險思想を包含すれども事實に於ては其れ等の部分を取りて以て之を吾國に實行せんと企つるものなく、危險ならざる部分にして見るべき者あるが故に其の部分のみを取りて以て道德修養の資となさんとするなり。其の危險なる部分に對しては當然行はる可らざるものとなし、關せず焉の態度を取るに至れり。恰も一個の桃果を手にし其の腐敗せる部分の有害なるを知れば棄て、食はず、而も其の新鮮なる部分を撰みて之を用ひんとするが如し。桃に慣れざるものは其の腐敗せる部分あるを見て恐れて近寄らず。遂に其の全體を廢するに至る。桃に慣れたるも

のは腐敗せる部分あるを見ても敢て驚かず。今日日本の儒教に於るも亦之れと同じ。其の危険なる部分を見ても別に異しむことをなさず。唯吾が日本には採用すべからずとなし、之を見ること恰も弊履の如くなりしのみ。是れ儒教が吾が國に同化せられたりといふ所以なり。水戸藩が孟子を禁ぜしは理論としては正當なれども必ずしも常識に合せりと謂ふ可らず。

佛教も亦之れと同じ。其の絶對の佛を信ずる點に於ては必ずしも吾が國體に合せざる者あり。此に於て眞言天台の如きは兩部を立て以て日本に容れられんことを求む。然れども慈悲忍辱の教の如きは凡そ人の天性として之れを好愛せざるなし。故に大なる社會力として能く其の生存を維持しつゝあるなり。其の外佛教より來りて日本の社會力となれるものは決して少しとせず。

耶蘇教も亦日本に於る一大社會力となれり。徳川氏の時九州一帯耶蘇教を信ずるもの多く一種の社會力をなせしが徳川氏は之を嚴禁し踏繪耶蘇の像を踏ましむすらなさしめて以て之を抑壓せんとせり。ために徳川時代に於ては一時其の路を斷ちしが明治に至つて再び傳道せられ或は國體と矛盾するが如き言動をなすものありしと雖も次第に同化せられ、今日に至つては宗教は精神内の活動にして道徳は歴史的社会の現象なりとして觀察するの態度を取り得るに至り、漸く立脚の地を得其の徒も亦何等迫害を蒙むることなく獨立なる一個の社會力となれり。

日本の文明は模倣的なり。佛閣の如き其の最も甚きものなり。朝鮮を旅行するものは何人も朱塗りの伽藍の多くして且つ皆日本の佛閣に類するものあるを見るべし。且つ日用品に於ても支那、朝鮮乃至

は西洋より入り來る者多く、人をして宛然博覽會を見るの感あらしむ。西洋人が「日本人は絹を着けたる猿なり」と言へるも、誠に理りなり。然れども一切の模倣は悉く日本の國體に由りて同化せられたり。

其の然る所以のものは日本固有の習慣極めて強固なるものあればなり。外國の文明も日本固有の習慣を變ずる丈の力なかりしなり。更に一步を進めて之を考ふるに地理的關係は能く日本をして同化の實を挙げしめたり。人類地理學者の多く唱導するが如く島國は大陸の文明を吸収し醸造し花を開き實を結び更に之を大陸に逆送せんとするの傾向を有す。セムベルの如きは日本英國を以て其の好適例となせり。蓋し海洋を隔て、僻在する孤島に輸入せらるゝ者は凡て必ずしも頻繁ならず。故に孤島は善く之を咀嚼するの時間を有す。恰も少食の人の胃は常に消化し居るが如し。殊に日本の如く人口の多

くして、神道的習慣の旺盛なりし者は能く外來の文明を消化するを得たりしなり。

第十節 世界的思想の波及

日本が外來思想を甘受し、而も能く之を同化し了りしこと前述の如し。然るに今日に至り更に思想の勃興せるものあり。即ち泰西より入り來るものにして今其の一般を述べれば左の如し。

イ デモクラシー 世界大戰以來世界的思想の變動は大なるものあり。十九世紀以來化醇せられんとして未だ現はれざりし一切の主義學說等は此大戰爭を機會として勃發し天下公然のものとならんとするに至れり。即ち彼の平和主義の如きは國際聯盟に由りて多少實現の曙光を認めんとし、社會主義の如きも日本に於てすら公然唱導せ

らるゝに至れり。大戰以後の世界は其の思想に於て一大變動を來せり日本が外國の思想に由りて影響せらるゝの甚しきこと未だ今日の如きはあらざるなり。外國の思想にはあらず。世界の思想なり。其の波動の中心が主として外國に在りしといふのみ。而も其の根本に横はる所の思想如何んといふにデモクラシーは是れなり。デモクラシーは一切思想の基礎なり。一切活動の淵源なり。論理的に言へばデモクラシーは決して完全なる思想矛盾なき理論にはあらず。唯一個の要求として見るべきものなり。何んの要求か。平等の要求是れなり。平等の要求は壓制せられたる階級弱者の階級より起る。故にデモクラシーの名は最も適當なり。何んとなればデモクラシーは希臘の古代に於ては貴族政に對する民主政にして貴族に反抗するの意味を含有する文字なればなり。

何故に此の如き要求が起り來りしか。一切人民の知識の向上是れなり。人民の知識は向上せり。唯由らしめらるゝを以て満足することなく、自己自身を知らんとし自己自身に治めんとす。國體の差異あるがために其の發現の形式を異にすと雖も兎に角此要求の猛然として高調せらるゝは實に今日の狀態なり。或はいふ大戰は主として労働者貧者の手に由りて成就せられたり。故に彼れ等の要求が現はれて以て此思想となれりと。固より戦争以前と雖も此種の思想は之れありき。乃至古代に於ても此種の思想之れありしと雖も其の猛然たる勢ひを示めし天下公共の者となるに至れるは大戰に於る貧民者及び労働者の勞苦與りて力あることは疑ふ可らざるなり。此くして勃興したるデモクラシーの思想は世界的に根本的となり一切の活動一切の思想皆之れより出るに至れり。デモクラシーは要

求なり。人民の聲なり。古代は人民の政治を意味し、單に一種の名稱なりしが、今日は要求として見らるゝものとなれり。デモクラシーの思想と言はんよりはデモクラシーの要求といふを以て當れりとなす。何を要求するか。平等是れなり。平等の思想は古代と雖も之れなきにあらず。然れども實現せられしことなし。賤民階級を認めし古代は言ふも更らなり。鎌倉時代に於ては人商の名あり。徳川時代に至りても階級の城壁は嚴として動かす可からず。明治に至り法律上には比較的平等なりと雖も貴族の特權の如きあり。此要求に反すること大なるものなり。政治上の平等、經濟上の平等、人格上の平等、一切の平等を要求するは今日の傾向なり。平等の要求は可なり。而も不平等の存在は事實なり。平等の要求は民衆の進歩なり。而も不平等の存在は踰ゆ可らざる限界なり。平等の要求は民衆エネルギーの

増大を示めすものなり。而も不平等の存在は民衆エネルギーの差の必然的なることを示めすものなり。故に理想的に之を言へば社會の理想は平等にあらず。或る範圍内の平等なり。此平等を認めつゝ、而も一面不平等を不平等として其の分に安んずるは個人の人格の上よりもいふも社會秩序の上よりもいふも必要なりとなさざる可らざるなり。

デモクラシーの要求は世界的に勃興し、日本も亦其の影響を受けた。大戰以前に於ても此要求ありしと雖も未だ今日の如く盛んなるはあらず。此要求は何に由りて満足せらるべきかといふに其の第一は普通選舉なり。第二は労働者の地位向上なり。第三は官僚主義の改正なり。第四は陪審制度の實現なり。第五は貴族制度の改正なり。普通選舉、選舉資格に程度あることは今言ふを須ひず。獨逸の新

憲法は二十歳以上の男女には悉く之を許可せり。然れ共二十歳と制限するも薄弱也。要するに程度問題のみ。日本に於て如何なる程度の普通選挙が實現せらるゝや是れ亦其の當時の政治問題にして豫想するの價值なきことなれども如何なる程度にせよ其の實現の曉には日本人の要求の大部分が達せられたるものといふべし。

労働者の向上、労働者の保護は社會主義の夙に唱へし所。社會主義は其の根柢に於てデモクラティックなり。其の労働者にのみ限らるゝに於ては労働問題といひ或は社會主義の思想といはるゝも其の社會一般の者たるに及んては則ち稱して以てデモクラシーとなす。封建時代に於る階級主義の餘弊は雇主と被雇人との間に主従の如き關係を附し、雇主は輕蔑の眼を以て被雇人に接するを常とす。無智盲昧なる雇主と雖も雇人に對しては恰も恩惠あるものゝ如く心得傲然

たる態度を維持するを以て普通とす。社會的機關組織の明瞭となれる今日、頗る改良せられたる者ありと雖も然れども一般に之を論ずれば雇主は如何に無智盲昧のものとなし、自己を以て成功したるものとなし、才智ある者となし、労働者の上に位するものなりと自信し。毫も謙下することをなさず。乃ち知識の程度により貧富の如何に由りて、上下の別を立てんとするなり。故に雇主が雇人の上に在りと思ふが如く、文筆ある者も亦雇主の上に位するものとなすなり。百萬の財産あり、と雖も目に一丁字なきものは輕蔑せられ人の下風に立つを免れず。之を今日の人情となす。然れども労働問題の勃興は雇主をして輕蔑の念を去らしめ平等なるものとして自覺せしむるに至れり。固より完全ならず。又完全なるべきにあらず。何んとなれば労働者自身の上なるもの殆んど之れあることなければなり。

労働組合の成立するに至る迄は労働者の利益の十分に保護せらるることなきは明かなれども兎に角日本人の要求が一部満足せられんとしつゝあるは疑ふ可らざる所なり。

官僚主義の改正 官尊民卑の習慣は次第に消滅せり。労働使節といへば昔しは美なる名大なる稱として見られたるならんも今日にては單に労働者の代表者として見らるゝに過ぎず。大臣といへば昔しは人民の上にある人物の如く、亦其の地位も人民の上にある様に思はれたれども今日にては單に一個の職業たるに外ならざる有様となれり。官僚的なる氣風は至る處に改良せられんとするは實際狀態なり。此れ亦デモクラシイなる一大社會力の如何に人心を司配しつゝあるかを示めせるものと謂ふべきなり。

陪審制度の實現 立法行政の方面に於て民意を尊重するの氣風は

夙に發達せり。乃ち司法の方面に於ても亦民意を重んずるは最も必要のことといはざる可らず。此れ陪審制度の論ある所以なり。其の弊害と長所とは今此に論ずる限りにあらずと雖も兎も角其の説のデモクラシイに根柢するは疑ふ可らざるなり。

吾が日本の法律に於ては裁判は天皇の名に於て行はる。アメリカが人民の名に由りて行ふと好一對なり。天皇の名に於て行ふからは被告人は自己の罪を陰蔽し、又虚偽の申立をなすが如きことある可らず。検事は適當と信ずる以上更に過酷の論評あるべきにあらず。辯護人も亦被告の言ひ得ざる所以外に於て被告の罪を軽くせんとするが如きことある可らず。各人其の心底を盡くすもの、之を裁判所の實況となす。公平と冷靜とは其の特徴なり。此以外に於て検事は被告を惡むこともなく、亦判事が被告を輕んずることもなし。判検事の

官職に人民以上といふ意味もなきなり。

若し人民以上のものとして論告し訊問し判決するとせば人民は其の判決に服従せざる可らず。何んとなれば人民以上のものなる以上は其の智測る可らず、其の行ひ信ずべく、其の裁判は自己の意に満たざるものあるにせよ何等か深さ根柢あるものなるべければなり。然るに三審制度は明かに之を裏切りつゝあるにあらずや。人民以上のものとして判決しても控訴に由りては其の判決の取り消さるゝことあり。此の如き場合には前判決は即ち誤りなりしものと謂はざる可らず。被告も亦通常の人格者なり。通常の人格者を以て通常の人格者に對す。輕蔑の念ある可らざるは明かなり。

「認定は裁判に於ては免る可らざる語なり。而も程度問題なり。通常の人格を以て認定す。其の過誤なきを保し難し。出來る限り過誤

なきを期せんには陪審員を設け之れに諮詢するを以て一種の良法となす。是れデモクラシーの思想當然の結果なり。

貴族制度の改正 貴族は人爲的の階級なり。子孫は偶然の結果なり。貴族の特權はデモクラシーの思想を去ること遠し。貴族なる名稱の存在するは固より可なり。但だ貴族なるがために其の子孫は愚かなると狂なるとを問はず。悉く政治に關與し得るとなし乃至は一般の國家的事業に關與し得るとなすを排する者なり。氏族制度の繼承たる現今の社會が天皇を奉戴するは當然のことなり。或は家柄の古き者が古きがために世人欣羨の對象となるも亦當然のことなり。然れども新たに作られたる華族が生れながらにして政治に關與するは今日の思想に合せざるものとなれり。

□ 無政府主義 吾人は此に無政府主義を評するの最も適當なる

ものあるを信ず。先づ第一に記憶せざる可らざるは無政府の本場は露西亞なること是れなり。而も此主義の代表者とも見るべきバクトニン、クロボトキンの徒が皆貴族なると是れなり。ロマノフ王朝の壓制は尋常にあらず。農奴虐待も亦普通にあらず。同情の念は何人の胸裡にも湧き出でざるを得ず。此れ無政府主義若くは解放主義の露西亞に起りし所以なり。クロボトキンの如き殊に農奴に就いて感ぜりと稱せらる。彼れは人間社會に於ける桎梏の慘なるを目撃し廣く動物社會を視察し何れの方面を見るも社會的相互補助が善く彼れ等の生命を保護する所以なることを感得せり。鸚鵡の群ブレイリイ犬の社會の如き、其の最も著しきものなり。又嘗て曰く。真正なる一婦一夫の結婚は獨り鳥類に於て之を見ると。乃ち彼は下等動物が其の本能に従て生活し、能く完全なる社會的生活を爲し得るを見之を人

類の天性に比較して以爲らく。人類も亦其の自然の狀態に於ては必ずや相互補助し能く其の生を遂ぐるを得んと。彼れは人間性の絶對善を假定し、其の上に建設せらるゝ理想的社會を想像せり。論じて茲に至れば吾人は彼れの思想の甚だしく支那のそれに類するものあるに驚かざるを得ず。人性の絶對善を假定し、其の上に社會は成立し得るとなすは支那に在つては程明道となし淮南子となす。其の他必ずしも尠少なりとせず。然るに其の上に建設せらるゝ理想的社會を構成するは老子其の人となす。老子は古代を以て淳朴の世となし。仁義道德の目なく而して大道自ら存すとなせり。其の民は渴して飲み飢えて食ひ。混々沌々。雞犬の聲相ひ聞ゆるを以て理想郷となせり。程明道は即ち以爲らく。人性は絶對善なり。故に五倫五常ありて社會の維持せらるゝを見るなりと。老子は以爲らく。人性は絶對善な

り。故に五倫五常なき淳朴の社會を實現し得べしと。老子は今日の社會を以て季世となす。道德法令を以て理想的社會の取らざる所なりとなすなり。老子の理想とする所は衝動的生活の上に成れる社會なり。老子の絶對善の概念中には五倫なく五常なし。程子は却て之を以て最も必要なるものとなすなり。

今クロボトキンの理想とする所を見るに頗る老子に近き者あり。彼れも亦人性の絶對善を假定し其の上に相互補助の社會を現出せしめんとす。彼れの思想は露西亞の政治的社會的狀態に反動して起れる者なり。老子の思想も亦周代の繁文褥禮に反動して起れるものなり。老子は簡易を欲し、クロボトキンは無拘束を欲す。簡易と無拘束と相ひ距ること果して幾何ぞ。

宜なるかな。老子の思想は魏晉の交に至り、化して清談となり、虚無

主義(nihilism)となり。社會をして道德的混亂狀態に陥れしめたり。而も彼れ等は政治的混亂狀態を惹起せしめんとはせざりき。何んとなれば專政々治以外何等の政府を見しことなき支那人のことゝて政府を恐るゝこと甚しく且つ政府を以て當然存在するものとなし、無政府主義の如き極端なる思想を作り出すの餘裕なかりければなり。クロボトキンは之れと異なり、極端なる壓制と極端なる虐待とを目撃し、且つ希臘羅馬以來の各種の政體を比較研究し、一面には科學的研究の勢力自由民權の思想等を以て其の腦髓を充填し居れるがために、大膽にして且つ極端なる無政府主義を唱導するを得たるなり。支那の虚無主義をして露西亞に生れしめば必ずや無政府主義を唱導せしならん。元來虚無主義に就いては支那と露西亞との間に深き關係ある者の如し。支那に虚無主義あり。露西亞に虚無黨あり。杜翁は嘗て老子の

書を翻譯せんことを希望せり。吾人は此種の關係に就いては更に研究する所あらんことを期す。

老子は古代を以て理想となせり。韓退之一たび之を駁せり。以爲らく老子は古代を以て理想となす。然れども其の後世亂れて息まず故に聖人仁義を作り法令を制し以て治平を講ぜり。古代に復歸せんとするは世の進歩を知らざるものなりと。吾人東洋人より見れば老子の説の如きは單に一老人の囁語に過ぎず。此翁亦人を弄するかなと思ふのみ。其の實現す可らざるとは言ふ迄もなく之を實現せんとして努力する丈の茶人もなきなり。老子自身すら之を實現せんとはせざりしなり。然るにクロボトキン^ウの無政府主義に至りては之れと趣きを異にし、動もすれば則ち之れに耳を假さんとす。其の故何んぞや。科學の光學問の聲なる背景が之をして然らしむるのみ。吾人を

以て之を見るに古代の社會は野蠻未開の状態なり。平穩なる状態を維持することなく、不斷恐怖の念に襲はれつゝありき。司配の慾あり。此に於て會長あり。下等動物に於る強者は即ち人類に於る會長なり。會長あれば從て又君主あり。君主あれば從て又國家あり。君主は次第に立憲的となり以て今日に至れり。同時に國家としての行動も亦次第に進化し以て今日に至れり。是れに由りて之を觀れば國家は次第に發展せる者にして其の淵源に於ては個人の司配的本能なり。更に他の一面より見れば人間の集合團體に於て一個の強制力の必要なることは人性其者に於て之を見るべし。即ち人性は衝動的に行動せんとするものなれば同一物に對して相ひ争ふを免れず。乃ち強制力あるにあらざれば之を決定すること能はざるなり。個人は自由を愛す。而も強制力あるにあらざれば此自由を確保すること能はざるな

り。此れ過去數百千年の歴史に由り、數千百の共同生活の狀態に由りて明かなる所。何人も之を疑ふこと能はざるなり。レーニンが良心裁判の原則を實行せんとするが如きは無經驗の致す所にして其の失敗に終るや火を睹るよりも明かなり。道徳のみにて社會の平和が得らるべきものとすれば則ち過去の或る時代に於て、地上の或る社會に於て一つ位は法律なき狀態の實例を得べきなるに事實は之れに反し、堯舜の世すら三千の刑法ありと稱せらる。人性の自然にして已むを得ざるに出るものといふべし。

由是觀之。權力なき社會を假定するは即ち是れ人性の自然に背反するものなり。地球上の人類を以て組成せらたる社會は權力なくして一日も其の平和を持すること能はざるなり。人性の絶對善を假定すること、其れ自身が既に誤りなり。動物の社會が相互補助に由りて

維持せらるゝを羨む勿れ。人類は動物以上に相互補助をなしつゝあるものなり。然れども他の一面には動物以上に自我主義を主張し又他を排斥せんとするの傾きあり。絶對善といふは唯其の美點を見たるのみ。荀子が人性の惡なる方面のみを見たと正さに相ひ對する者なり。學說として如何程の價值あるかは識者を待つて而して後に知らざるなり。

說者或は云ふ。無政府主義は理想なりと。吾人を以て之を見るに理想は實現せんとする方向を示めず者なり。實現の方向と何等の關係なき者は理想にあらざるなり。之を何とかいはん。權力なき社會の如きは即ち此類のみ。

吾人はクロボトキンが農奴に同情せるの美德を稱揚せざるを得ず。又動物界に於る相互補助の美點を觀察し之を人間社會に應用せんと

するの苦衷を諒察せざるを得ず。又極端にも無政府主義を唱導せざるを得ざりし境遇に同情せざるを得ざるなり。然れども學說としては何等の價值なき者たることを認識せざるを得ず。學說としては價値なき者とすれば則ち此れ主義のみ。主義は感情なり。露西亞の感情なり。之を日本に移すべきにあらず。則ち之を仆滅せんとするものあるも亦已むを得ざるなり。然りと雖も今日の人は決して一個の意志に由つて司配せらるゝものにあらず。大臣が人民を司配すと思ふは過去の思想なり。一人が一人に由りて司配せらるゝ如きは愚者千人の古代はいざ知らず。今日に於ては到底想像し得ざるなり。唯無政府主義の思想が自由平等を提唱し無拘束を主張し、汪洋として大なるものあるは今日の社會を美化する一助なきにしもあらざるなり。

第十一節 世界的思想と國體の新解釋

以上の思想は沛焉として日本に氾濫し殆んど底止す可らず。社會少くとも社會一部の人心は之れに由りて司配せられつゝあるなり。若し此潮流にして社會進歩の趨勢に一致せざるものなれば固より論なきことなれども若し一致するものある以上は必ずや之れが實現を期せざる可らず。唯社會進歩の趨勢と稱するものは何を標準としての立論なるや。俄かに斷言し難きものあり。然れども人心の歸嚮する所あり。其の中一時の風尚に外ならざるものあり。數千百年來次第に馴致し來れるものあり。今彼のデモクラシーの如き亦是れなり。專制政治あり。貴族政治あり。公民政治あり。而して後民衆政治あり。民制政治の要求は即ちデモクラシーの要求に外ならず。

前節に述べしが如く儒教佛教耶蘇教等の入り來りし時に於ては吾が國體を以て善く彼れ等を同化することを得たり。島國なる位置が同化を助くるに與かりて力ありき。然るに今日は之れと異なり。外國の思想入り來ること頻々梭の如く外國と日本との間波濤萬里を隔つるが如きの感は殆んど之れあることなし。外來の思想を受ること恰も溺るゝ者の水を吞むが如し。此時に當り吾が國體を忘却して只管迎合を事とせんか。誠に男子らしからざることと謂ふべし。日東帝國の男子たるもの豈此くの如くにして可ならんや。否男子の常として「我」の觀念あり。日本の觀念あり。彼の脚下に屈するを甘んぜず。彼れをして吾が腹中のものたらしめんとす。自我は個人の根柢なり。國家も亦自我主義なきを得ざるなり。苟も一個の學問的立脚地あるものは如何なる學說の入り來ることあるも必ず自家の立脚地より判

斷し自家の藥籠中のものたらしめんとす。彼の或は自然派となり。或は朦朧派となり。忽ちにして未來派となり。乍ちにして象徴派となり。一々迎合を之れ事とするは何等立脚地を有せざるものゝ態度なり。之を女子の貞操なき者に譬ふべし。今彼の西洋崇拜家を見るに、社會主義を見れば則ち社會主義者となり。デモクラシトを見れば則ち又忽ちにしてデモクラシストとなる。一層又一層。恰も地層の次第に堆積するが如く、前後何等の關係もあることなし。又日本全體との關係の如きも全然之れを考ふることなきなり。此の如き行爲は以て男子の本性に叶ひたるものとなす可らず。國家の一頁としての性情に副へるものといふ可らず。

Si l'egoïsme est la base de notre édifice social, l'hypocrisie est la clef de votre

論じて此に至れば則ち吾人は日本を通じて以て一切の思想を觀察

せざる可らず。國體の解釋は此に於てか廣汎ならざるを得ざるなり。而も人間生活の單位は國家なり。國家は一民族を以て中心となす。民族の團結を維持するは最重要の事なり。民族の團結を維持せんとせば民族固有の國體に依らざる可らざるなり。

此くいふ時は人或は言はん。國體は變遷する者なり。必ずしも拘泥するに及ばざらん。若し歴史に拘泥し、國體に執着する時は破天荒の進歩もなく、舊弊を釐革することも出來き得べきにあらざるなりと。吾人を以て之れを見るに歴史は事實なり。國體も亦事實なり。何れも社會を司配する所の力なり。之れに違背せるに於ては忽ちにして社會の混亂を來すを免れず。又國體を顧みるにあらざれば自國の行動に對して何等の標準をも認めざることゝなるべきなり。何等の標準なく只管に各種の新思想を取り入るゝことのみ苦心する時は或

は反對の主義をも併用することなきを保せず。社會の混亂は掌を反へすが如し。社會混亂し國家を滅亡せしむるは各人希望する所にあらず。徒らに新奇思想に憧れ迎合を之れ事とするものと雖も此れ只平和の日のことにして一朝戰爭の開始せらるゝあらんか。自國の勝利を願はざるものはなかるべし。賣名の徒は一時的に國家を忘る。故に唯新奇を競ふを得。苟も吾が國の發展を願ふし、民人の幸福を思念するもの誰れか吾が國體を以て標準となすを知らざらんや。

醉ふて自我を忘るゝものは身を亡ぼすを免れず。佛教を取り儒教を採り、乃至耶蘇教を用ひて以て社會力となせる日本は其れ丈遙かの點に於て既に從來の日本にあらざるなり。而も日本を忘るゝものなし。是を以て獨立あり。發展あり。以て今日に至れり。今や世界思想の氾濫に會す。若し吾が國體を忘れ、歴史を斥くるに於ては興亡俄

かに斷ず可らざるものあり。

吾人は國體を以て標準とせんとする者なり。而も國體に本末の別あり。末なるものは棄つべきも本なる者は棄つ可らず。單刀直入。吾人の意のある所を言はんか。古代の外國思想は何れも狹隘なる國體觀念の爲に同化せられたり。故に其の同化も亦必ずしも完全ならず。今や世界的思想を同化せんとするに際す。廣汎なる國體觀念を以てせざる可らざるなり。何をか廣汎なる國體觀念となす。吾が日本の道徳的性質なることを意識し、君民同治正義人道を以て唯一の標準となすことを認承し、天皇を尊び祖先を敬ひ國家構成に伴ふ各種の道徳を發揮することは是れなり。何をか狹隘なる國體觀念となす。外國のものとし言へば直ちに之を排斥せんとするが如きは是れなり。時勢の進歩に伴はざる習慣例へば階級主義の如きを固持せんとするも

のも亦然りとなす。芳醇一樽。人の酌むに任す。量小なるものは酔ふて自ら倒る。大なるものは一杯又一杯。樽を傾けても猶足らざらんとするなり。汪洋たる世界の潮流は狹隘なる國家觀念の能く包含し得る處にあらず。國體を忘るれば則ち日本亡ぶ。而も國體に就いて最も廣汎なる意味を發見するにあらざれば以て今日に處するに足らざるなり。若し之を發見するに於てはデモクラシー可なり。社會主義も亦可なり。無政府主義も亦可なり。唯取捨する所あるのみ。

第十二節 人文東洋主義

社會論を終るに臨み吾人が特に大に提唱して世の注意を喚起せざる可らざる者は人文東洋主義是れなり。吾人は嘗て丁酉倫理誌上に於て一たび之を提唱せり。而も西洋心醉を以て人間の天職となせる

大正七八年の日本は此包含的な態度を諒解すること能はざりき。吾人は刻下の情勢に鑑み益々此主義を高調するの必要なるを信ずるものなり。今少しく之を開陳せん。戦争は相互に理解するの機会を作り、從て相互に結合するの動機となるは争ふ可らざる所、戦争以後國際主義 (Internationalism) の勃興することは吾人の嘗て唱導したりし所。其の一部は國際聯盟となりて以て現はれたり。然れども國際聯盟必ずしも信用するに足らざることは何人も之を認む。國際聯盟は存在するにせよ。他の一面に於て人種の觀念の存在するは最も注意すべき所。人種平等案の否決は最も善く之を示めすに足る。人種の觀念にして存在する以上は相互に融和する能はざること亦明かなり。殊に地理的狀態は日本をして東洋に孤立せしむ。日英同盟は印度のために英國に利用せらるゝのみ。利害關係の上より見て更に此れよ

り重大なるものありとすれば其の睽離の迅かなること掌を反へすが如し。英米は同文同種の國民として相互に提携するの素地を有す。佛伊の如きも日本より寧ろ英米に同盟し易しとなす。人種は感情問題なり。而も此感情は人間を司配する最も根本的のものなり。白哲人より見れば日本人は半野蠻的なり。而も人口は増殖し溢れて南洋に流れ、滿韓に漲り。兵甲は年を追うて鋭く、進歩の勢ひ翦然として戢止す可らず。嫉妬の眼を以て日本を觀察するは今に於て然りとなす。朝鮮民が獨立を希望し絶へず反抗の氣分を示めしつゝあるは何人も周知する所。世界太平の時に當りては如何ともす可らずと雖も一朝事あるに至りては其の勢俄かに悔る可らざるものあり。支那が東洋平和の意味を理解せざるや久し。國家存立の意味を諒知せざるや甚し。山東問題は日本獨立の唯一の方法たることを知らず。日本の

獨立が支那保全の唯一の道たるを解せず。英米のために分割せらるゝも日本のために讓歩せざらんとす。即ち支那の國情亦實に測る可らざるものあり。由來印度政治は英國の最も苦心する所。壓迫し強制し僅かに能く之を統御す。而も印度人は東洋の民として同く東洋に國する日本を信頼すること深し。傳へ聞く。或る叛亂事件の時日本は英國のために之を鎮定せり。印度人は始めて日本人の頼み甲斐なきを覺れりと。白哲人此の如く東洋人亦此の如し。知らず日本は誰れと共に結托せんか。日本たるもの東洋の一孤島として純然たる孤立を守るの外なかるべきなり。

獨逸強しと雖も終に聯合國に敵するに足らず。日本の孤立も亦大に憂ふべきことならずや。蓋し人の國を破らんとする種々の道あり。一を兵甲となし。二を經濟となし。三を人種となし。四を思想とな

し。五を疾病となす。兵甲を以てするものは拙の拙なるものなり。經濟を以てするものは中なり。何れにせよ孤立を以てして聯合に對す可らず。人種を以てするものは永遠の計なり。思想を以てするものは彼を破ると雖も亦我を破ることなきを保せず。疾病を以てする者は窮餘の策なりと雖も亦人道に違反する者たるを免れず。

然り而して戦争は次第に進歩せり。小よりして漸く大なり。一州内の軋轢が一國內の鬭争となり。一國內の鬭争が國と國との戦争となり。國と國との戦争が遂に化して主義と主義との競争となる。世界の大戦は英米の人文主義と獨逸の軍國主義との争ひに外ならず。獨逸の軍國主義にして亡びたる以上は英米の人文主義が獨り天下を司配し、一大潮流をなすこととなるなり。而も此潮流に對する者は日本的人文主義是れのみ。猛烈なる人口増加は之れが基礎を作りつゝ

ある者なり。東洋固有の文明を有するは乃ちそれが素質を有するものなり。世界嫉妬の對象となりつゝあるは乃ち將來の可能性を暗示しつゝあるものなり。何れの方面より見るも日本は英米の人文主義に對抗すべき位置に在り且つ又對抗し得る運命に在る者なり。世界目下の形勢は日本をして不知不識の間に世界最高の舞臺に上らしめんとしつゝあるものと謂ふべし。

孤立の情勢を以て此氣運に際會す。如何せば可なるか。吾人の見る所を以てすれば他なし。國體を闡明し、日本の我を以て彼れの我に對せんのみ。興亡未だ俄かに知る可らざるなり。而も迎合を之れ事とし、一層又一層國を擧げて英米の人文主義下に立たしめんとするは思想としては皮相的なり、動機としては輕佻なり、人物としては浮薄なり。彼の頑冥固陋なる國體論者固より今日の時勢を論ずるに足らず

と雖も、皮相的輕佻浮薄なる論客も亦國を誤ること甚しとなす。彼れ等が迎合を事とし忌憚なく其の説を吐露するは大に可なり。然れども吾人は之れを以て人格ある者の行動となすこと能はず。蓼食ふ蟲も好きく。牝馬は地の類地を行くこと窮りなし。而も何等の目的あるにあらず。目的は人格者に由りて授けられざる可らず。

彼の種々の説を吐露する者は果して日本國家の觀念あるか。唯に自己の賣名の爲にするか。將た何等の目的もなく單に知識慾を満足せんとするか。苟も國家の存立を以て根本となさんか。少くとも國家主義を以て世界と共存せんとするか。其の必然の結果として國體の觀念を抱かざるを得ざるべし。自己の名譽を發揮せんとするものは自己の歴史を忘却すること能はず。即ち自己の名譽を發揮せんとするは學說にあらずして唯感情なり。國家の發展を策せんとするも

亦學説にあらざりて唯感情なり。此感情なきは人にあらざるなり。乃ち此感情を以て立論の中心となすは事實を事實として論ずる科學の取るべき當然の方針なり。

吾人は日本人が正義人道なる大標準に由りて統一せらるゝことを知る。有史以來天照太神がうしはくとしらすとを區別せられし大御心に本き歴代の天皇は日本をしられ絶えず正義人道の理想に近かれんとしつゝあるを知る。是を以て日本人は外國人に對しても嘗て殘酷なる行ひをなせしことなし。人道主義の名は日本人の當然專有物となすべき所なり。日本の外交は今に至りて幼稚なりと評せらるるが如く苟も正義の觀念に矛盾したることは寸毫も之を行ふを得ざるなり。日本人にして此の觀念に本づき此の態度を取りて以て朝鮮人に對せんか。其の信用を得ること期して待つべく、滿洲人に對し、露

西亞人に對し、乃至は亞細亞南方の諸邦に對せんか。日本信頼の聲は靡然として勃興し、アングロサクソンの人文主義に對抗し、世界二大潮流の一となるもの決して難きにあらざるべし。

日本は帝國主義を以て外國に對せんとするものにあらず。軍國主義を以て國家を立てんとするものにあらず。日本社會は其の根本たる國體を維持し而も汪洋たる思想を以て充満せらる。國體を闡明すると思を培養すると兩者其の一を缺く可らざる也。要するに日本の社會は種々なる都會に於て各々其の社會力を有す。又全體として共通なる社會力を有す。其の或る者は佛教より來り或る者は儒教より來り、或る者は耶蘇教より來る。殊に近世に至ては種々なる外來思想の在るあり。而も國體に由りて淘汰し以てアングロサクソンの人文主義と對抗するの社會的素質を具備せんとするなり。是れ實に

日本人の有する使命なり。吾人は之を以て學校教育に於る一學科となすべきを主張するものなり。其の昔し明治の初年志士仁人日本を憂ふるもの、西洋各國の間に位して何等遜色なからしめんとし先づ日本の中心思想を樹立するの必要を感じ小學教育にすら國體學の一科を加へたり。今日に於ては此の如き狹義の國體學を以て満足すべきにあらず。此の如き狹義の國體は既に闡明せられたり。然れば第二の日本の中心主義たるべき東洋人文主義こそ學校教育に於て執るべき方針なりといふべけれ。

第四章 人民論

第一節 人民と社會

社會としての敘述は社會力を中心とするものなり。人民としての敘述は社會力に關係することなく、單に個人として之を觀察するのみ。個人として之を見るも勿論社會力に關係する所あり。個人は社會力の結果なると同時に社會力も亦個人の結果なればなり。唯其の個人に就いて先天的の要素を敘述せんとするのみ。先天的の要素か、後天的の結果か。そは程度問題なるが故に必ずしも判然たらざるあり。一般に日本人の性情を述るのみ。此の如きは民族心理學の領域にして此小篇の能く盡くし得べき所にあらず。吾人は唯日本人は畢竟日本人として殆んど先天的に其の性能を作られ居ることを示めさんと

するのみ。

第二節 日本人の劃一性

劃一主義は日本の特色なり。從來の習慣を打破する上に於ても極めて迅速なると同時に新計畫を採用する上に於ても亦極めて敏捷なり。殊に交通の發達したる今日に於ては同一習慣に由りて統一せられんとするの勢ひ極めて猛烈なり。彼れ等は萬世一系の君主を戴き、氏族制度といふ簡單なる社會組織に由りて建國以來習慣付けらるゝがために同一の習慣ならざれば其の本心に於て満足せられざるなり。然り。恰も彼れ等の本能なるが如く然り。彼の動物が互ひに群せざれば満足すること能はざるが如し。福地櫻痴居士が嘗て日本の劃一主義を評して堯舜の世と雖も亦之れに及ぶなしと言へるが誠に妙味ありと謂ふべきなり。

日本人は此く統一的なるがために極端なる性情を産出すること能はず。僧侶の如きも亦俗化の傾向あり。家を離れ、山に入り、氣を吸ひ、霞を食ひ以て其の一生を終ること支那の道士の如くなるは日本人には望む可らざるなり。佛蘭西に於ては貴族富豪の子女にして大勇猛心を起し聖教に歸依し、獨身生活を守りて其の身を終る者あり。而も此の如き篤志の婦人を出せし郷里は之を以て名譽となすといふ。

凡そ世界各國、其の建國の由來に於て日本の如く自然的なるはなく、又簡單なるはなし。島國のために此特別なる状態を保存するを得たるならんも兎に角世界に於ても其の類例を見ざる所に屬す。此點より見れば日本は實に比類稀れなるの國なり。大陸的生活は之れと趣きを異にす。各種の人種は互ひに軋轢し、或は占領し、或は放逐し、或は

混合し、以て其の社會を成せるものなるが故に自ら多種多様な習慣に從はざるを得ざるなり。純一質、統一質の如きは殆んど之を發見すると能はざるなり。故に大陸の住民には地方的觀念極めて強く、地方としての習慣風俗を固執せんとするの傾向頗る強しとなす。英國は島國なれども大陸と接近し居るがために人種の移動甚しく、スコットランド、アイルランド、イングランド、ウェールズの四州は互ひに相ひ調和せず。各其の地方的感情を維持しつゝあるを見るなり。彼れ等は劃一の何たるやを理解すること能はず。各々其の本性、特徴を發揮するを以て人間の能事となすなり。獨り英吉利のみにはあらず。歐羅巴の諸洲多く然り。個人主義が早く、歐羅巴に發達せるは決して怪むに足らざるなり。之れと同じく、支那の如きも亦個人主義の結晶たり。其建國の由來に於て統一する所なければなり。是れに由りて之を觀

れば日本人の劃一的なるは日本建國の由來之れをして然らしむる者といふべきなり。

第三節 日本人の現世主義

日本人は現世主義なり。未來の觀念の如きは極めて少し。死後靈魂の行方に付いて考慮したることなし。又他世界の觀念の如きも殆んど之れあることなし。蓋し印度の如く氣候又は社會の事情にして甚しく厭世の觀念を起さしむるものあらんには未來の觀念も亦勃興せしならんも、日本には此種の原因なく、只管に現在の社會、風光に憧憬しつゝありければ未來の觀念他世界の觀念の如きは之を起すの要なかりしなり。

日本人は現世主義なり。萬事共通的標準的ならんことを希望する

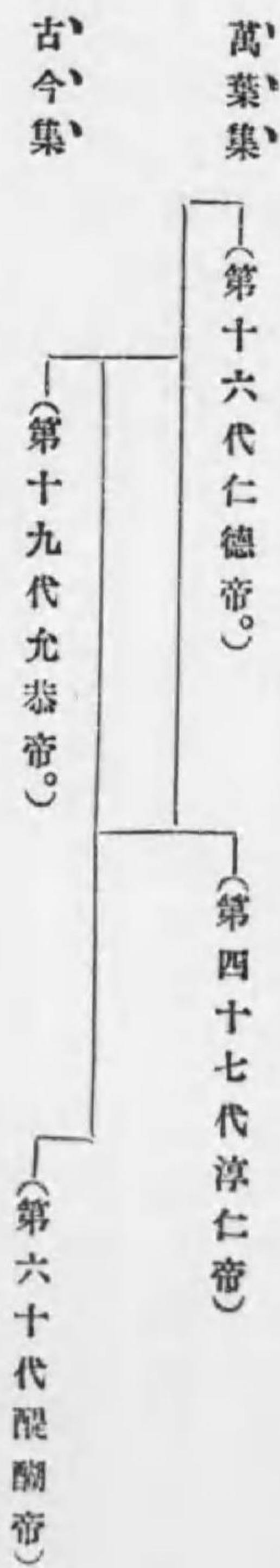
ものなり。故に哲學の如きは到底起り來ること能はず。支那の性理學も日本に入りては復古學となり、常識となり、淺薄なる者となり了れり。伊藤仁齋が氣一元論を唱へしが如きも其の適例なり。氣の一字は支那に於ては程明道以來哲學的に解釋せられ、殆んど實在の如くなりき。此れ支那近世哲學の興味ある所以なり。然るに仁齋に至りては之を以て再び古代の氣となし、又常識の氣となし了れり。日本人の性情は之れに由りて最も善く代表せらるゝものといふべし。支那の佛教が日本に入りて祈禱宗となれることも亦其の一例なり。蓋し祈禱念佛題目の如き淺薄なるものにあらざれば日本人の性格には不適當なるを免れざるなり。故に日本に於ては哲學もなく、又深遠なる宗教もなし。但だ現在に生活し、現在を享樂するのみ。然れども此風潮は世界的思潮の變動と共に次第に變動せられ、深遠なる哲學を好愛す

る傾向の生ぜんやう吾人の最も留意指導すべき所なり。吾人が老子を背景として哲學運動をなせるも亦此風潮を變動せんとするに外ならざるなり。

第四節 日本人の精神的統計

日本人は劃一主義にして、現世的なり。其の活動の様式如何。歌に付いて統計的に研究するは極めて興味あるが故に萬葉、古今、金葉、新古今の四歌に就いて之を示めさん。歌集の最古なるは萬葉なり。最古の歌は仁徳天皇皇后の御歌にして最も新しきは淳仁天皇の天平寶字三年正月一日因幡の國應にて詠めるものなり。其の間約四百四十六年なり。古今集は醍醐天皇の延喜五年四月十八日紀友則紀貫之凡河内躬恒壬生忠岑等四人に勅して萬葉集に洩れたる古歌及び其以後の

歌の秀逸なる者を選ばしめ一千百首を撰集せるものなり。萬葉集の時代を淳仁天皇の天平寶字三年と劃すれば古今集中には萬葉時代の人歌は僅かに二首のみなるなり。但だ詠人不知の歌中には萬葉時代の物幾何あるか未だ詳かならず。其年代を比較すれば左の如し。



萬葉集は紀貫之が『ますらをぶり』と云へるが如く巧緻の風なしと雖も質實雄大なり。古今集の歌は所謂『たをやめぶり』にして優美絢爛の趣ありと雖も雄大なる氣魄に乏しき嫌ひあり。されば自ら語調の上にも影響して兩者相異なる所あるなり。即ち萬葉は主として

五七調にて古今は七五調也。前者は發音明晰終結に近づく程益々確乎たり。後者は發音こそ明瞭なるも結尾に至りては全く口籠りて力足らず。金葉集は白河院御讓位の末、藤原俊賴一人院宣を奉じて之を撰す。天治元年より大治二年までの間に三度奏上す。歌數少く、見る可き者も亦少し。新古今集は土御門天皇元久二年後鳥羽上皇の院宣によりて當時の名匠源通具藤原有家藤原定家藤原家隆藤原雅經等の撰進せる者なり。歌調は織細緻美をいたすと雖も古今集よりも一層力弱きの觀あり。今萬葉集の統計を見るに左の如し。

母	父	親	天皇	對象	長歌	短歌
1	0	1	2			
14	2	15	12			
哀傷						
母	親	王族	天皇	對象	長歌	短歌
0	0	13	5			
2	6	51	17			
賀						
雜	父	王	天皇	對象	長歌	短歌
0	0	1	2			
3	1	1	6			
尊皇						
故郷	山川	敬神	尊皇	對象	長歌	短歌
11	20	1	3			
120	100	4	17			

想

女子	7	5	9	23	25	9	7	5
男子	123	108	22	181	3	1	663	675
兄弟	0	0	9	23	25	9	7	5
男女間	181	3	1	663	675	428	123	108

夫 妻 雜

夫	3	11	6
妻	11	60	42
雜	3	11	6

羈旅	12	3	5	50	1
遊獵	3	5	50	1	11
風月花鳥	5	50	1	11	979
雜	50	1	11	979	312
無常	1	11	979	312	38
羈旅	12	3	5	50	1

父を想ふよりも母を想ふの多きは注意すべし。此れ即ち當時に於る人情の一端を示めすものといふべし。男女間の戀愛の多きは固より自然なり。而して無常を咏ぜるものは十一のみ。今其の實例を示めせば左の如し。

現身は數なき身なり山川のさやけき見つゝ道を尋ねな。

吾命を長門の島の小松原いく代をへてか神さびわたる。

世の中は數なきものか春花の散りのまがひに、死べき思へば。

世の中は空しきものと知る時しいよゝますく悲しかりけり。

生死の二つの海をいとほしみ潮干の山を忍びつるかも。

世の中の志きかり庵のすみくいていたらん國のたづき知らずも。

いさなとり海や死にする山や死にする死ぬこそ海は潮干て山はかれす

れ。

天地の遠ほき始めよ世の中は常なきものと語りつぎ長らへ來れ天の原
振りさけ見れば照る月を盈欠けしけり足引の山の木ぬれも春去れば花
咲きにほひ秋づけば露霜負ひて風交じり紅葉しけり現身もかくのみな
らし紅の色もうつろひぬばたまの黒髪變り朝の糸み夕のかはらひ吹く
風の見えぬが如くゆく水の止まらぬ如く常もなくうつろふ見ればには
たづみ流るれ涙止めかれつも。

冒問はぬ木すら春さき秋づけば紅葉ちらくは常をなみこそ。

現身の常なき見れば世の中に心づけずて思ひぞ多き。
世の中は何に例へむ朝開きこぎゆく舟のあとの白浪。
古今集に至りては無常の歌は少けれ共其の絶對數に於ては増加せり。
左の如し

賀					對象
雜	友	太	女	王	天
		子	御	族	皇
1	10	1	2	1	4

哀傷								對象	
雜	友	女	妹	姉	妻	母	父	中	天
					親			宮	皇
9	15	1	1	1	1	1	2	1	3
								長	但
								歌	し

想										對象	
戀	戀	戀	臣	友	家	子	夫	王	母	法	天
雜	女	男						族	皇	皇	
59	147	44	1	21	3	1	1	4	1	1	5

風物							對象
雜	無	離	故	旅	山	風	
	常	別	郷		川	物	
(長歌) ⁴					(但し) ⁴		
					顯歌) ⁴		
388	28	15	2	5	19	319	

古今集中無常を咏ぜる歌例は左の如し。

足引の山のまに〜陰れなん浮世の中はあるかひもなく
知りにけむ聞きても厭へよの中は涙の騒ぐに風ぞしくめる
世の中は夢か現か現とも夢とも知らず有りて無ければ

新古今に付ては左の如き結果を見る。即ち

賀						對象
雜	友	民	女	皇	右	君
			御	族		
1						5
2						25
6	5	1	1	2	2	

別離							對象
雜	友	女	男	子	父	臣	院
2	2						1
7	19	2	1	1	1	2	

傷哀							對象
母	父	臣	皇	中	院	后	君
			族	宮			
							1
							1
8	5	2	2	3	8	6	5

戀				對象
故	山	風		
御	川	物	對象	
3		20	時萬短	6
	3	19	時萬古	4
	3	52	時萬古	35
			以後今	11
13	26	605		43
				209
				91

- 一、古時トアルハ 古今集時代ノ歌ナリ
- 二、萬トアルハ 萬葉集ニアル歌ナリ
- 三、萬時トアルハ 萬葉集時代ノ歌ナリ

子	9
妻	1
兄	7
友	1
女	8
雑	12

羈	2
旅	2
無	4
情	5
神	1
祇	1
教	5
釋	12
雑	339

新古今の如きは歌を以て技工となし、天然の情を其儘に發揮することなし。今其の無常に關する者を擧ぐれば左の如し。

露の身の消えば吾こそ先立ためをくれんものか森の下草

定めなき昔がたりを數ふれば吾身も數に入りぬべき哉

世の中に晴れゆく空にふる霜のうき身ばかりぞ置き所なき

神祇に關するものは左の如し。

(猿田彦)

久方の天の八重雲ふり分けてくだりし君を我ぞむかへし

(玉依姫)

飛びかける天の岩舟たづねてぞ秋津島にはみやは始めける

(神樂をよみ侍りける)

おく霜に色も變らぬ神葉の香をやは人のとめて來つらむ

(社司どもきふれに參りて雨乞に侍りけるついでによめる)

おほみ田のうるほふばかりせきかりてぬせきにたとせ河上の神

(賀茂の歌)

鏡なるかけみたらしの水の面にうつるばかりの心とを知れ

釋教に關するものは左の如し。

(普門品心念不空過。)

おしなべてむなしき空と思ひしに藤咲きぬれば紫の雲

(勸持品)

さらずとて幾世もあらじいざやさは法に贊へつる命と思はむ

(不倫盜戒)

浮草の一葉なりとも磯がくれ思ひな掛けそ沖つ白浪
(不邪姪戒)

さなきだに重きが上の小夜衣吾つまならてつまなかされそ
(不酤酒戒)

花の下露の情は程もあらじ酔ひな進めそ春の山風

金葉集は歌も少く良好なるものも亦少きは前述の如し。其統計は左の如し。

傷哀							賀				戀			別離			その他								
雜	子	妻	夫	母	女	門	雜	友	門	院	君	雜	女	男	雜	友	臣	連	雜	無	釋	神	羈	山	風
						御			院									歌		常	教	祇	旅	川	物
7	1	1	1	1	1	1	10	5	1	1	13	34	144	41	5	12	1	19	101	11	24	2	4	4	277

古今以後に至りては歌題が一定せられ、従て人情を見るものとしては甚だ不都合なれども、少くとも男女戀愛の標準的なりしと、風物を咏ずるといふ技工的思想の發達せるとを知るべし。又一般に無常に就いては日本人が其れ程大なる感受性なかりしことを見るべきなり。即ち此簡單なる統計も如何に日本人が佛教を其儘に理解し其の儘に體得するの資格なく矢張り日本人は畢竟日本人たるを示めず者といふべし。

結論

吾人は前四章に於て簡單ながら日本の國體、政體、社會及び人民を論述せり。吾人は國體なる言葉の極めて廣義なることを知る。即ち風俗習慣等を總稱するを知るなり。政體は其の中の一部なり。日本の國體は生々主義を以て中心的事實となす。政體に就いて之を言はんか。君主は道德的なり。君民共和は日本の特色なり。而も正義人道を以て唯一の標準となすものなり。社會に就いて之を言はんか。種々なる社會力の存する者あり。其の或る者は支那より來り、或る者は支那を通じて印度より來る。更に或る者は西洋より入り來れり。而も島國の特色として能く之れ等を同化せり。今後と雖も吾人は日本を通じて之を同化せざる可らず。日本を外にして之を同化せんとす

るが如きは徒らに迎合を事とする者にして人性の自然に矛盾するものなり。彼れ等は娼婦を學ぶものといふべきのみ。日東帝國の人豈日東帝國を知らずして可ならんや。日東帝國の民。豈日東帝國を以て立つの意氣なくして可ならんや。此くの如きは人性の自然なり。殊更に態度を造り、媚を彼の郎に呈せんとする者にあらざる限りは必ずや此の意氣あるべく、此志操存すべきなり。更に人民に就いて之を見れば其の性情の外圍に由りて作らるゝ者は暫く之を措き、建國の由來より劃一主義現世主義の鑄型せらるゝあり。日本人は此の如き人種たるなり。即ち如何に社會の理想に就いて思考すと雖も日本の國體、人民の性情を基礎とするにあらざれば到底行はる可らざるなり。

附 錄

國體と中産黨

國體論終

國體論

二四六

此篇は大正七年の米騒動を端著として、日本の國體に於て中産階級の必要缺く可らざる所以を述べたものである。舊稿であつて必ずしも今日に適切ならざるものもあるが、國體論の附録としては無くてならぬものと思ふ。大正七年の當時に於ては中産階級なる言葉は社會に於ては全然顧みられなかつた。私は世人が労働者のみに同情し、此方面を忘却するを慨し、此篇を稿したのであつた。今日から見れば、中産階級といふも明了の様であるが當時に於ては其の如何なる者なるやに就いて随分苦心し、其の様なものあるやすら疑つたこともあつた位である。其の後次第に此言葉が用ひられて世人の腦中にも比較的に判然たる觀念を描かしむる様になつた。但だ世人の普通に謂ふ中産階級と此に言ふ中産階級とは多少異なつて居る。其の點は私の趣旨のある所であるから特に注意して讀まれんことを希望する。

第一章 社會の變調と中産階級の救濟

一 貧富の懸隔

十九世紀の始めに於て西歐諸州に於る貧富の懸隔は非常に著しくなつた。即ち王侯僧侶の壓制を免れ、所謂アトミズムの状態となり各々政治上の自由獨立を得た代りには却て資本主の壓迫を蒙り之れが爲めに酷使せられ資本主が益々其の財産を増殖する一方職工階級は益々哀れなる状態に陥つてしまつた。茲に於てか社會主義的運動即ち労働者を保護せんとするところの運動は英國に於てはロバート・オーエンに由りて惹起せられ、次第に其の勢力を高め來たつたのである。此の労働者保護の運動は實に當時に於て必要なるものであつたのである。如何なる人と雖も労働者の當時の状態を見て惻隱の心を起さ

ない者はない。社會問題の起り來るのは寧ろ當然と云ふべきである。故に各國に於ても亦引き續き起り來つた。即ち職工保護であつたのである。其の當時の職工は如何なる状態であつたかと云ふと。衛生上の注意も届かず。精神上の慰安を得ることも出來ない。又何等自己の權利を主張する機會も許されなかつた。今日の勞働者と到底日を同じうして語る可からざるものがあつた。ハックスレーの如きすら歎息して此の様な不幸な状態である位ならば寧ろ地球の破壊せられんに如かずと云ふに至つた。翻つて現今の日本を見ると云ふと是れ亦貧富の懸隔が増加せんとする傾きを示めして居る。實業に伴ふ當然の結果として資本主は益々富を貯ふるに拘はらず。職工は常にそれなる状態にある。鐵法以上に進むことは出來ない。殊に戦争の結果として成金を作り又細民階級にも金は落るけれども貯蓄心がな

いたため矢張り元の生活状態に陥て居る。貯蓄心のないといふ心理作用は後に之を述べる。貧富の懸隔と云ふことは現在に於て餘程甚だしく感ぜらるゝやうになつた。殊に成金の標象として示さるゝところの有形物が澤山ある。別荘であるとか西洋館であるとか自動車であるとか。目に見えて成金風を吹かすことの出來るものが澤山あるのであるから貧富の懸隔と云ふ觀念がひどく人民を刺戟するやうになつたのである。事實貧富の懸隔が出來た上に此觀念を一層鮮明ならしめる有形物の出來たとは實に十九世紀の始めに於けるよりも尙ほ甚だしいものがあるのである。茲に於てか富豪を呪ふの聲は到處に起つて來た。是れ實に戦争に伴ふ一時的現象と見做すべき性質のものであるかと云ふにさうでない。此の戦争に依て増加した傾きはあるけれども社會自然の趨勢として起り來つたのである。此の

感情は到底免れないのである。二言目には金持は贅澤な奴だ木偶坊の癖に大きな面をして居ると云ふやうな具合になつて來た。即ち日本の社會に於ける貧富の懸隔と云ふとは將來長く免れることは出來ないものである。

二 感情の爆裂

此の感情は偶々米騒動となつて現はれ來つた。即ち米の高いことが動機となつて起り來つた。従つて總ての富豪に對つて現はたのである。其の中には憎むべき又哀れむべき悪戯が存在して居つた。此は暴動に伴ふ野次馬の常として免るゝことの出來ないものであるが其の點に於ても寧ろ貧富懸隔の觀念が腦髓の中に蟠つて所謂社會主義的感情が一時に起り來つたのである。騷擾は傳染的である。然れども傳染には其れ丈の感受症狀がなければならぬ。富山を中心とし

て各地一様なる精神状態の下にあつたものと見る外ないのである。内務省が新聞記事を差止めたのは騷擾の傳染的なるが爲めてあつたが其れには少し遅かつた。若し富山の騷動が起つた時より既に之れを差止めたならば多少の効果はあつたかも知れないが其れにしても電報電話其の他の方法に依て通信が行はるゝから總體興奮して居る時期に當つては騷亂を未發に防ぐことは容易に出來ない。騷亂が日本全國に行渡つたと云ふ點に於ては實に千古未曾有である。然も殆ど總ての富豪が襲はれたと云ふ點に於ても此の騷亂は決して無意味なるものと云ふことが出來ない。或る意味に於ては徹底したるものと云ふべきである。之を以て一時的傳染的の疾病とのみ思ふのは誤りである。其の疾病に罹る丈の潜伏的症狀が出來た。日本が其れ丈け健康を害した者と見て養生するのが親切の話してある。

三 騷擾の原動力

騷動の原動力は勿論米價の騰貴にある。日本を通じて到る處に歎聲を聞いた。之れに加ふるに貧富懸隔の感情を以てす。内外呼應共鳴するに至つたのである。

此の騷擾に就ては特殊部落が到る處與つて力あると云ふことである。平生壓迫を蒙ること甚だしいが爲に之を機會として爆裂したものと見るべきである。京都の如きは一軒の米屋が特殊部落の一人を侮辱した。其所で部落のものが怒つて殺到したのだといふ。此事を聞いた特殊部落の人々如何んぞ忍耐するを得ん。暴動の特殊部落より起るは寧ろ自然である。特殊部落の感情は單に普通人に對するものであつて富豪に對する者ではない。けれども一般の潜伏的症狀は特殊部落と共鳴した。伊勢の津の如き其の一例である。故に今回の

騷亂を以て單に特殊部落に原因するものと思ふは大なる誤りである。其れ以上更に深き根底があるのである。

特殊部落の感情の如きは一朝一夕にして改めらるゝものではない。彼等をして感情の阻隔なからしめんため何んな聖人が出て來ても出來得ることではない。特殊部落の改善も宜いけれども、今回の事件から思ひ付いて特殊部落の改善に力を盡くし以て幾分なりとも騷亂の源を塞ぎ得ると思ふは誤りである。今回の事件は特殊部落の改善のみに力を注ぐべきことを暗示しない。究局的に社會を改良すべきを暗示しつゝあるのである。

人或は今回の騷亂を以て政府に淵源すと云ふ者もある。或る代議士の如きは公然之を述べて居る。内閣が代りさへすれば米價も下るし社會は安靜になると。此の如きは爲我主義の政黨員の言ふこととて

あつて殆んど一顧の價値もない。當面の社會問題は區々たる内閣の更迭に依て決定さるべき性質のものではない。内閣は三年か四年の内にとつてしまふ者である。其れに依りて消長する社會問題は高の知れたこととて吾人の容喙すべきことでない。勿論政府の施政は米價乃至一般物價に影響する。一千萬圓を支出して米を安く買へばそれ丈相場が下る。けれども總ての物價が騰貴して居る。米のみ格別安くすることは出来ない。相場は社會的であり、世界的である。唯政府のやりやうに依て左右されると云ふことは出来ない。左右せらるゝいは只多少のことである。それも政府が戦争をしたとか講和をしたとかいふやうな大事件のあつた場合には大影響もあらうけれども、今回の如き殊更何等大事業が行はれないで只一般に物價が騰つて來たといふのは其の原因は内閣にあるのではない。吾人は茲に於てか日

本社會の根本的健康診断を行はなければならぬのである。

四 買占めの害悪

買占といふことは個人が行爲ではない。社會の行爲である。故に一人を取り抑へても他に幾人も出来る。色々變形してやる。又買占の聲を聞くと風聲鶴唳皆賣惜みをやる。是れ買占は個人が行爲でない、社會の行爲たるがためである。買占は昔よりあつた。唯だ尠然たる社會力となつたのは今日のことである。

古代支那には所謂常平倉なるものがあつた。貴い時に賣出し、廉い時に買つて置くのである。此れは社會のためになつたのである。買占にも大小がある。日本六千萬の人が使ふところの米は非常なものである。一人や二人で買占める分量は少ないものである。唯如何に少量なりと雖も買占をするものがあると云ふ其の聲を聞くや否や一

般に緊張し賣惜みをやる。爲めに騰貴すると云ふことになる。唯金を持つて居る丈の人間で其の者のために物が騰る。而して總ての人が苦しむ。買占と云ふことは場合に依ては罪惡である。絹物や贅澤品の如きは何んなに買占ても差支へない。寧ろ場合に依りては國家の爲になる。けれども米とか麥とか日本人日用の食品を買占ると云ふことは場合に由ては一般人民を苦しめることにもなる。先日買占をやつて社會の憎みを受けた者が臨時救濟會が出来ると云ふと直ちに數萬圓を寄附した。新聞には鬼の目にも涙と云ふて居る。果して涙であるかそれとも焼打が恐いか又數萬圓出しても焼打されるより利益だと思つてやつたのであるか分らないけれども數萬圓を寄附しても尙ほ且つ普通の人間のすることが出来ない。衆人の憎むところとなつて此の廣い天地を狭く暮すより外ないのである。

五 今後の問題と中産階級

之れまで社會問題と言へば十九世紀の始め頃より常に職工保護と云ふことになつて居つた。乃至一般に勞働者を保護することのやうにのみ思つて居つた。之れがために現今に於ては職工は比較的によく保護されて居る。殊に今日の日本に於ては各工場は何れも景氣がよいから職工は同盟休業と云ふ武器を以て資本家に反抗せんとする。雇主の方でも已むを得ず給料を増すと云ふ鹽梅で、職工は割合に保護されて居るのである。大正三年の調査に依て細民と見做すべき者は左の如くである。

- 一、一人にして月收九圓以下の者
- 二、二人にして月收十四圓以下の者
- 三、三人にして月收十七圓以下の者

四、四人にして月收二十一圓以下の者

大正三年に於ても職工の給料は普通之れ以上であつた。其れ以來次第に増給した。今日では夜業を混ぜて一圓以下と云ふは先づ少ない。或る電氣會社の職工は一圓四十錢を要求して居る。それてなければ生活が出来ないと言つて居る。元來職工に給料を與へる標準は六ヶ敷い。一家族を生活させてやると云ふことは其標準にならぬ。十人もあるやうな家族を生活させて往くと云ふことは出来るものではない。若しそれが出来るものとすれば總ての人は職工になつてしまふ。さうかと云ふて一人を養ふ丈を以て標準とする譯にも往かない。カール、マルクスは勞働の單位を定めて以て見積らんとして居るけれども此れも六ヶ敷い。

何の道職工は割合に能く保護されて居る者である。殊に職工慰安

會の如きものも澤山出来て居るから職工の氣焰は益昂るばかりである。法律上は別として職工の同盟罷業は頻々として行はれる。勞力は商品と同じものである。同盟罷業は申合せて商品を貴くするのである。商人と同じことである。買占よりは罪はない。職工保護の問題は今後此儘で行はるれば宜い。而して今後の社會問題は單に職工にのみ限らるべき性質のものではない。

物價騰貴の影響を受けて困るところの者は彼の大なる會社工場等に屬せずして個人にて經營して居るところの勞働である。例へば人力車夫の如きは人の需要を待つのであるから、需要が減れば収入も少くなる。物價騰貴のため車に乗る者なども少い。直接間接大工場に屬して居る者にはさう云ふことはない。石炭の人足ですら一日四圓の收入があると云ふことである。然るに個人的なる按摩、湯屋、菓子

屋、小商人などの中には需要が減じて非常なる苦境に陥つて居る者もある。是等の労働者の爲めの社會問題を攻究するは真正なる意味の社會問題である。直接間接工場に屬して居るものは工場の方面から金が出るから割合に苦痛を感じない。日々新聞社などへ來る投書の中に職工の家ではうまい物を食つて居り。雇主の方では却て其れ以下であるといふやうなのが澤山ある。社會問題は徹底的ならんことを要求する。これと同時に中産階級の人士は非常なる壓迫に遇ふて居るのである。此方面の救済は如何なるか。社會は之れに付て何等の援助をも與へない。是れて良いものであるか。今後の問題は實に此にあると思ふ。即ち社會の人々は労働問題にのみ屈托して居るが吾人は中産階級問題が寧ろ大問題であると思ふ。日本人はアングロサクソンのデモクラシーに對して東洋の人文を鼓吹する大責任を有

つて居る。此れには中産階級が一番必要である。此點から見ても中産階級保護が今後の問題でなくてはならぬ。

第二章 中産階級の社會的位置

一 貧民階級の精神

人生生活に取つて必要缺く可らざるものは苦心經營の精神である、一寸の蟲、五分の魂あり。假令ひ壘一枚と雖も一戸を構へ、竈を持つて居る以上は其の經營に於て相當に精神を勞する。其の中に成長するところの子供は親の苦勞を頌つから役に立つ。養育院の如き大なる家屋の中に生活し、大なる經濟に依て養はれて居る子供は困難を知らないから自己を獨立せしむることが出来ない。

大なる會社に屬して勞働問題と云ふ保護の下に其の生活を安全にするを得て居る者は一戸を支へて居るとは言ひながら大家屋大經濟の中に保護されて居ると同じやうなものである。職工は得意にな

つて是の權利と云ふことばかり考へて居る。精神を充填し安心せしめて居る所のものは唯之れ丈である。従つて職工の域を超越するとは出来ない。職工の中には固有なる一種の道德的感情がある。其の中には随分善い者もある。金錢貸借の如き或は恩義を重んずるが如き是れである。けれども彼等は其の情調に於て他の階級と異なるから、自ら他の階級に入ることが出来ない。又貯蓄心がない。其の目を暮せばよいと云ふやうな有様である。大に其の精神を向上せしめることは望み難いことである。紳士階級に入れやうとしても彼等に固有なる社會階級の精神を取去ることが出来ないから六ヶ敷い。

所謂貧民階級なるものも其の精神に於ては甚だ低級である。彼等の中には中流階級の落魄れてあつて隨て精神の高尙なる者もないではないけれども其の子供の代になると中流階級の面影は既に全然之

れを喪失して下。恥もなければ外聞もないと云ふ状態になる。貧民階級は社會問題と云ふ大なる勢力の保護を得ない丈に其の精神は畏縮して居る。職工階級にせよ。貧民階級にせよ日本國家を如何にすべきやと云ふやうな考へはない。少くとも言葉に現はれる程ではないのである。

農民階級になると云ふと此の點は趣きを異にして居る。貧乏な者であつても苟も土地を耕して生活して居る以上は、其の地面を守らんとし、隨て日本國家を愛するといふ考を有つて來る。昔の武士は落魄れても商人にはなりたくないといふたが矢張り農といふ者の精神には尊い所があるからである。百姓は我田引水になり易いものであるが其の長所は確かにある。今日の如く土地を棄て、職工になる者の多いのは面白からざることである。

又細民即ち職工的勞働的貧民階級には貯蓄心が無い。一日六十錢の金を得て白米二升を買つて四十二錢を拂つた日には餘る所僅かに十八錢であり。此れて家賃を拂ひ副食物薪炭類も買ふことになつて居り。それで間に合して居る。廉買券を貰つて外米二升を十六錢で買へば餘る所四十四錢になる。故に少しの貯蓄は出来る譯であるけれども今日は儲かつたからと云ふてうまい物でも食つてしまふ。中産階級の人は之れを見て以て其心事憐れむべきものとなす。然れども是は大に考へてやらなければならぬのである。即ち彼等に貯蓄心が無いのではない。人間のことであるから貯蓄すれば宜いと云ふことは分つて居る。けれども貯蓄する丈の精神状態に這入つて居らぬのである。即ち彼等の精神は一種の社會的疾風に罹つて居るのである。其の根柢は何處にあるかと云ふと全收入の豫算がないと云ふこ

とにある。月給取りであれば一箇月百圓の収入あれば支出が幾らであるか。其の費目を數へさへすればそれで分る。極めて判然たるものがある。故に貯蓄と云ふことも出来易い。然るに日給のものであると云ふと假令高い給料を取るものにしても休めば取れない。夜業でもあれば餘計になる。今月の中に休みのないことは保障が出来ない。従て全収入の豫定が付かない。故に多く得たる時はそれ丈儲かつたのだと思つて居る。偶然のことだと思つて居る。故に偶然に之れを費消してしまふ。又給料の少くなつた時も又偶然のことだと思つて居る。故に偶然だと思つて我慢してしまふ。彼等は豫算を樹てると云ふことは出来ないものであるから貯蓄の出来やう筈がないのである。月給取りであると云ふと其の収入の最低額を計上して其の以外は貯蓄の方面に廻はすことが出来るけれども、細民階級になると

云ふと到底斯の如き餘裕がない。日々の生活の壓迫に耐へ切れない。我慢に我慢をして居るのであるから偶に少しの利益でもあれば人並の物が食つて見たい着て見たいと云ふ氣になる。氣が緩るむのである。此は人間として寧ろ當然のことである。故に彼等は貯蓄心がないのでなくして貯蓄心が起り來らないのである。否貯蓄せんとする精神状態になつて來ないのである。斯の如き精神状態は何處から來るかと云ふと即ち今日の日給制度である。即ち社會的の制度であるのである。之れを社會的の疾病と云ふべきである。故に細民階級の改良と云ふことは一面に於て彼等の日給が鐵法以上により多くなつて來ると云ふことと一面に於ては餘程質朴なる生活に慣れしめて精神的勇氣を起さしめると云ふこととにあるのである。此等の方面から進むの外に道はない。

二 富豪と華族

富豪及華族の精神は如何。富豪といふても一概には言はれない。高尚な紳士もあるが一時的に成金となつたものの多くは言はゞ目は一丁字ない者である。一旦富豪になると云ふと五欲を恣にするを以て唯一の樂みとして居る。其の精神は貧民階級程破壊されて居らぬに、しても五欲を恣にすることの荒々しきがために社會の風俗を破壊すること甚しい。彼等は既に奮發力を失つて居る。社會を指導する。去勢されたるものである。社會を指導する丈の氣力はない。

三 中産階級

斯く考へて見ると云ふと國家の中堅となるものは中産階級である。中産階級と云ふ中にも階級は澤山ある。けれども兎に角自ら努力し

自ら經營し社會の道德を維持し發展さして行かうとするものである。大和魂を維持する者は詰り中産階級である。彼等は騒亂に就ては眉を擧めて居る。日本國家の將來を慮て居る。中産階級と云ふのは収入の多少にも關係はあるけれどもそれ許りではない。即ちカルチュアに在るのである。中産階級が眉を擧めると云ふことに於て社會は維持されて居るのである。此の心持が即ち國家を維持する中心であるのである。今回の騒亂に於て果たして如何なる状態であつたか。或る地方に於ては特殊部落が中心となつて大騒動をやつて居る際に中産階級が之れに同情しつゝあつたと云ふ。事茲に到つて却々面倒である。中産階級其のもの精神のデゼネレーションである。其の原因は那邊にあるかと云ふと貧富懸隔の甚だしいと云ふ所にある。中産階級は矢張り生活の壓迫に堪へられない。此の社會に對して呪

ひの聲を放たんとして居る者のあると云ふことを示して居るのである。中産階級の中でも収入の少ない者は其の體面を保つ上から其の困難名状すべからざるものがある。經濟の爲に精神を失ふと云ふことは中産階級といへども免れない。恒産なき者は恒心なし。恒産なくして恒心ある者は只士のみである。貧民階級、職工階級の如きは恒産なく恒心なき者であるけれども中産階級は恒産なくして恒心あらんとする者である。然し是れとても尙ほ且つ生活の壓迫には堪へられないから子女の教育も出來ず。不良少年も出るやうになる。終に其のデゼネレーションも餘儀なくなる。今後社會問題を研究する者は此れを以て中心點とせなければならぬ。

第三章 中産階級の精神と富

一 不平等は自然なり

社會の中に於て人は食ふために働くのである。是れは衣食階級は固より他の階級に於ても同じである。而して勢力の強いもの又智慧のある者は餘計成功する。勢力の少ない者智慧のない者は不成功に終る。其の他に僥倖と云ふことがある。今日の場合總ての人を平等にすると云ふことは勿論不可能である。矢張り今日の社會の儘に即ち換言すれば今日の不平等の儘にして行くより外ないのである。社會主義者が平等々と叫んで居るけれども何れも無理を言ふて居るのである。其多くは殊更に勞働者に同情しやうとして居る者である。彼れ等の多くは寧ろ反抗せんとして殊更に勞働者に同情しやうとし

て居る者である。若し勞働者も資本主も同等の生活をするやうなこ
とであつたならば誰が好んで資本を投ずる者があるか。世の中は生
存競争の場所である。平等などと云ふことを叫ぶ者に向つては此の
知れ切つた言葉を繰り返さなければならぬのである。人間の不平等
は免れない。一樣の機會を與へても不平等は直ちに生ずる。それ
も拘はず平等を叫ぶのは如何なる心得であるか。不平等は如何な
る黄金時代と雖も免れない。

二 富は私有にあらず

昔から個人の私有財産に就て種々議論する者がある。或者は言ふ
個人に私有財産と云ふものがあるべき筈はない。何れも祖先が掠奪
して因襲的になつて居るまでのことであるから正當に財産と云ふべ
きものではないと。其の淵源に溯つて言へば色々のことが言はれる

であらう。吾人を以て之を見るに左の如き事は言へる。即ち私有財
産と云ふものも國家の變形であるといふことである。國家が今日の
儘で繼續して居る限りに於て吾々は私有財産を享有して居るのみで
ある。國家が今日の儘でなかつたならば、私有財産と云ふものは全然
ないのである。即ち其の條件の下に國家から預かつて居る者である。
今日の儘と云ふは何んであるかと云ふと國家に權力があつて吾々を
保護してくれる間を云ふのである。國家の保護を受け國家の權力が
繼續して居る其の間に於ては勿論私有財産を享受することが出来る
のである。であるから私有財産と云ふものは國家と共に消長すべき
性質のものである。國家を超越して迄もあるのではない。して見れ
ば富豪の財産と言つて見たところて國家の所有物と云ふ意味は之れ
を認めなければならぬ。一萬の財産も、千萬の財産も同じく國家が今

日の儘に存在する限り吾々が預つて居ると云ふので絶對的に一萬圓に執着する、或は千萬圓に執着すると云ふ性質のものでないのである。預り物又借り物の意味である。故に自分の財産であるから自由に處置することが出来る、と云ふものの、苟も國家意識に一致する人間であつたならば、斯やうな取計ひはしない。即ち自分の財産は借り物で自由にする丈の權利を國家から貰つて居るのである。國家の大必要になることであつたならば、全財産を提供しても宜いと云ふ覺悟が臣民の本分である。國家は個人の全財産を取り上げるともある。然も個人之れに對する權利をも認めて居る。

是は根本問題である。斯の如き根本問題にまで這入らないにしても、富豪の財産は決して富豪自家のものでない。國家は勿論のこと社會の他の人々の恩惠であると云ふことに注意しなければならぬ。自

分一人であつては出来ない。大平洋の中央に一人て立つて居つたのでは何人も巨利を博することは出来ない。富士山の絶頂に立つて居つたのでは金儲けを博することは出来ない。社會の人の需要があるが爲めに利を博することが出来るのである。富豪の財産も半は社會の恩惠に依て來たものと言はなければならぬ。今日此の世の中に生れて來たのですら有難い仕合せと言つて感謝する。自分が其の財産に依つて大なる幸福を受けて居るとすれば自己の力のみでない、此の社會の爲めであるから社會に感謝しなければならぬのは寧ろ當然である。斯く言へば獨り富豪ばかりでない。貧乏人と雖も社會の爲めに生活して居るのであるともいへる、けれども貧乏人は社會の爲めに貧乏して居るとも言へる。今日買占をする者があつて買占したるが爲めに貧乏するものもある。貧乏は不幸である。其の不幸は何

處から來なかと云ふと矢張り社會から來たのである。故に社會に於て幸福だと言つて居るものは社會に對して同情心を發揮するのが當然である。或る慾張りの爺さんがあつた。村の有志が其の村に學校を建てるに就いて行いて寄附を乞ふた。爺さんは承諾しない。そこで貴方は此の村の爲めに金を儲けたのでないかと言つたところが一言の返答も出來ず澁々ながら寄附をしたと云ふ話しがある。實際さう云ふ譯であるから自己の財産と云ふたところで全然自分の力で作つたと思ふのは心得違ひである。

殊に今日の時代に於て澤山生じ來るところの成金は皆自分の力ではないのである。所謂僥倖である、僥倖といふても詰り日本社會のお蔭である。其の日本が世界に重きをなして居る所以は何んであるかと云ふと六千萬の人民があるからである。二十師團と五十萬噸の

軍艦があるからである。世界になくてならぬ思想と技術とがあるからである。其の中の一人たる日本人であるがために外國人も種々便宜を與へて呉れた。之れに依つて巨利を博したのである。して見れば其の博し得たる巨利は日本六千萬のお蔭である。六千萬の人に與へてしまつても宜い譯である。

又僥倖といふ方面からいふと汽車に乗つた様なもので良い場所の中ることもあり。悪い場所に中ることもある。後から乗つても偶然前の人が退いた爲に良い場所を占めることもある。

左様な場合には前から乗つて居つた人が苦しんで居るのを見れば多少席を譲らなければならぬ。之れと同じやうに僥倖で以て金を得ると云ふのは風向きの良い所に居つたからである。自分の力ではないのである。風向きが悪い所に居る人間は何時までも不遇に終るの

である。此の人間に向つては同情してやらねばならぬ。

富が僥倖であると云ふことは如何に人物が良くつても金が出来ないので分る。五千萬圓一億圓の金を作つても其の精神に於ては勞働者と相去る遠からざるものがある。之れを以て見ても富と云ふものは決して人間を偉らくする者でないことが分る。人間究局の目的は富でない。偉らくなるのである。金が貯つても人間は偉くならない。何處に行つても床間に座はらせられるといふことはない。それなら偉らくなるには何うするかと云ふと威嚴を有たなければならぬ。威嚴を有つには精神界に關係しなければならぬ。精神界に關係しやうとしても俄には出来ない。此に於てか富の使用法を考へなければならぬ。故に富豪となつたからには富の使用法を考慮するのが第一の仕事である。

三 戦後の失職者と資本主の責任

此の如く富を私有と思ふのは誤りである。此の如く社會的精神を有つて來なければならぬから工場主となつても此の意味に於て大に社會的精神を發揮し失職者に就いても責任を負ふの覺悟がなければならぬ。歐洲の大戦に乘じ輸出は澤山ある。各工場は何れも全盛を極めて居る。職工の賃銀は非常に高い。戦後を考へると如何であるか。一大恐慌の來ることは斷言するに憚らぬ。戦後歐羅巴は疲弊するとは言へ。主として實業に勢力を注ぎ貨物は續々として製造される。輸入の増加は明かである。紙の如き鋼鐵の如き。亦外國よりドック輸入されて來る。而して工場は今日の如き状態を維持することとは出来ない。此の場合失職者が多く出て來る。それ等失職者の中には社會の厄介になる者も少くない。少くとも直接間接に種々なる

罪惡が生じて来る。果して然りとせば工場主はそれ等職工に就て如何なる責任を負ふか。金の儲かる場合にのみ職工を歓迎し、他の工場より奪ひ取つて来て迄も自家の用に供せんとする。一旦不用となると之を解雇すること弊履よりも甚しい。而して社會の負擔を多くする。儲かる丈儲けて了ひ自分の腹を肥やして了へば其の後は社會に迷惑を掛けて顧みないと云ふのでは、人間としての義務責任が立たぬであらう。此の如き工場主は誠に無謀な人間であつて單に私利を圖つて居るところの動物である。是等の動物も自己の得たるところの富を以て社會の救済費に充つるの義務あることは明かである。財産は卿等自身の者でない。社會に寄附すべき性質のものである。此の任務を忘れるやうなことがあつたならば、眞個の動物となり了はるのである。

假令戦後職工が不用になつて来て之れを解雇せざるまでも職工の賃銀を低下するやうなことがあつては、矢張り職工は減ずる。又悪いことをするやうになる。何れにしても戦後に於て解雇される職工、又は賃銀を低下されたる職工より伴ふ社會の弊害と云ふとは工場主に於て其の責任を負はなければならぬ。工場主の利益は決して正當の利益ではない。後に到つて社會に弊害を残すべき利益である。茲に於て工場主たるものは單に自分一個の利益と云ふことを考へない。此で何等かの方法に於て社會に盡すと云ふ考へがなければならぬ。此れから見ても富は全然私有すべき者ではない。

四 富費消の方法

以上の如く財産は社會公共的の意味あるものであるから、之れを國家の爲めに用ゐるは寧ろ當然のことと云ふべきである。其の第一の

手段としては戦時利得税なるものを増加することである。之れも唯單に戦争の爲めに儲かつたのだから其の幾分を取ると云ふ意味ではない。以上述べたる如き論據から税を取るのである。次は相続税である。此の税は矢張り財産を子に傳へると云ふことは、子に譲り渡す所以であるから税を取ると云ふのではなくして、國家から一個人に自由にさして置いたものを其の子たる者が自由にせんとするのであるから第一に國家の手數料若くは相當の代金を以て買はなければならぬと云ふ意味に於て取るのである。

又自動車は殊に貧富懸隔の觀念を烈しくするものである。現に名古屋の騒動の如きは自動車を目掛けて之れを攻撃するに初まつたと云ふ位である。自動車に對して重き税を課するも宜い。之れも唯憎んで課するのではない。縣道、國道等は自動車のためには特に必要で

ある。自動車に乗るものは其の修繕料を拂はなければならぬ譯である。

更に他の一面に於ては富消費の方法を講ずる必要がある。是は強制的に出来ないことであるから已むを得ないけれども今回の騒擾の如きは其の一の動機となるであらう。各人は平生より富の性質を明かにし自分一人て喜んで居るべきでない。必ず平生から其の富を振り撒いて社會の爲に圖るを要する。今回の騒擾は此の意味に於て不幸中の幸と見なければならぬ。尙ほ更に進んでは富豪をして人格あらしめなければならぬ。人格あらしめるには精神事業に關係せしめなければならぬ。試みに思へ幾萬の金を積んでも佛教で言ふやうに妻子眷屬財寶身に就かない。死んで後迄も伴れて行くことは出来ない。財産の爲めに名譽の残ると云ふことはない。今日、日本第一の富

豪は誰れてあるか。名前さへ知らぬ者が澤山ある。苗字を知つて居ても、年寄りか。若い。知らぬであらう。又何んなことを言つたか。何んな仕事をしたかと云ふやうなことを知らぬのである。であるから金と云ふものは人間を尊くするものではない。自分で尊くならぬと死に際になつて樂に往生することが出来ない。平生より自分が後世に傳はるやうな仕事をして居れば割合に安樂に死ぬことが出来る。其の點から見ても富豪は富の使用法を攻究しなければならぬ。それには精神的事業をする外ないのである。六十面らをかゝへて新しく學問をすることも出来ないだらうから、せめて、其の方法さへ宜ければ矢張り精神界に貢献することになるのである。此點に就いて最も妥當なる見解を有する者は矢張り中産階級であるのである。中産階級は衣食階級ではない。富に付いて完全に理解して居る。富費消の方は

法を講ずるからには如何しても中産階級の精神を普及するより外ないのである。

第四章 中産階級の精神と労働

一 労働は社會成立の基礎

人間の原始的な生活又は根本的な生活は自然界を征伏し自然界の勢力を變じ自己の勢力となすことに依て成立するのである。自然界を征伏する爲に盡すところの勞力が即ち人間をして生活せしめる勞力である。人間の勞力に二種ある。何等特別に力を勞することなく唯單に生理的に自然に服従することが出来るものもある。例へば空氣を呼吸するが如きこれである。然るに又他の一面に於ては大に勞力を盡さなければ服従することが出来ないものもある。例へば谷底の水を飲むには自分で行くことが出来ないから必ず他人に依頼する。依頼すればその勞力に報ゆる爲め相當の勞力を以てせねばならぬ。贅

澤な人になると云ふと谷底の水は差置いて自分の家の水さへも自分では汲まない。他人に汲ませると云ふことになる。其の勞力に對して報酬を與へなければならぬのである。或は又自然界から收穫を得るにしても自分で行つて取つて來ることが出来なければ人の勞力を借りる。之れに對する報酬を與へなければならぬ。古代に於ては自分の勞力を以て報酬としたのである。勞力の交換が即ち之れであるけれども労働の交換丈けであると云ふと却々面倒であるから終には労働を貨幣に見積つて之れを以て交換の媒介とするやうになつたのである。であるから貨幣と云ふものは、獨逸の社會民主黨の言ふが如く人間の労働を單位として作らなければならぬ。労働を正當に見積るやうに作るのが當然である。今日のやうに一錢二錢五錢十錢と只單に何等標準もなしに作らるゝのは本統の貨幣ではないのである。

勞力を貨幣に見積るところから今日普通言ふところの報酬と云ふものが出来て来る。従つて貨幣は今日の場合に於ては勞力を有つて居ると同じことである。例へば一萬圓の貨幣を有つて居ると云ふことはそれ丈の勞力を有つて居ると同じことである。總て此のやうにして今日の社會は成立することが出来るのであるから矢張り澤山の金を貰つて居れば遊んで生活することが出来るのである。けれども此の如き人間が殖へたならば社會は疲弊する。勞働が社會の基礎である。貨幣がなくとも人間が働かさへすれば社會は成立する。工場は如何にして活動するかと云ふと職工が勞働するからである。職工が報酬なくして働いて呉れれば矢張り工場の維持は出来るのである。總ての人が一樣に働いて居れば貨幣の必要がない。ところが懶ける者もあれば働くものもある。又高尚なる勞力もあり。低級の勞力もある。

茲に於てか或る者は一週一日働けば宜いが他の者は三百六十五日働かなければならぬ。勞力の價值には其の位の違ひはあるが其れにしても勞働が即ち社會である。社會が生存して居るといふのは人間が社會力に従つて生活しつゝあるとに外ならぬ。故に勞働せざるものは社會の分子をなさぬものである。

二 勞働せざる寄生蟲を去れ

社會は勞働に依つて成立する。勞働が唯一の資本である。フイエーが資本は蓄積されたる勞働である (*The capital est travaux accumulés*) と言つたのは萬世の金言である。金は何を示すかと云ふに即ち勞働を示して居るものである。只勞働が何の位に見積られたるかと言ふことは金銀の産出に依つて異なつて来るのみである。勞働あるが爲に總ての物品が出来て来るのであるから社會の人々は皆一生懸命に勞働

しなければ國家は發展しない。閑暇階級が多ければ多い丈け社會は發展しない。四面楚歌の聲を聞くときは如何なる人も一生懸命に勞働する。現在の歐羅巴各國の如き是れである。女子の職業が増加して農業も女がやる。牧畜も女がやる。電車の車掌運轉手も女。郵便局から汽車の役員まで女がやると云ふやうな状態で女の職業が増加した。之れまで働なかつた女が斯く働くやうになつたのであるから大戦争をしながらも尙ほ且つ一面に於て社會を維持して行くことが出來た。平生斯の如く働いたならば國家は發展する譯である。平生は氣が張らぬから斯の如く出來ないけれども、氣の張る張らぬと云ふことは一は習慣である。昔の朝鮮の貴族のやうに懶けて居つては何事も出來ない。資本は蓄積せられたる勞働だから勞働せなければ國家は貧乏する。勞働すれば富む。今華族社會が新しく一種の職業を

やつて活動し初めたとせよ。人民は餘計幸福を受け譯である。けれども職業の種類は注意して貰はねばならぬ。良家の子女が繪葉書を賣つたり、花を賣つたりすることは吾々は感服しない。遊び半分に縋帶を作つたり、袋を貼つたりするのも馬鹿氣て居る。もう少し眞面目に働き得る仕事をやつて欲しい。華族社會であれば日本にない一種の技藝を日本人に教授するもよい。又日本のためになる講演をやるも宜い。其れ丈日本が昂上するのである。勞力を寄附するのも金を寄附するのも同じことである。

若し何等の勞力なく生活し居るものとすれば則ち彼等は實に他人の勞働に依て生きて居るものであるから、所謂寄生蟲に過ぎない。金は蓄積されたる勞働であるから金を持つて居ると云ふことは即ち彼等が勞働を有つて居ることを示すものである。即ち親が金を與へ財

産を譲つたと云ふことは、其の息子は何等勞働をしないでも他の人の十倍二十倍の勞働をしたと同じことになる。云ふ意味になる。けれどもかゝる金は自分の勞力を蓄積したのではない。他人の勞力である。假りに斯の如き人間許りであると假定して見よ。遂には社會は亡びる。して見れば勞力の交換は人間の生きて居る以上當然の義務である。此點を能く理解し相當に勞働し、一面に於て社會を指導しつゝある所の者は中産階級である。彼等は富豪や華族の様に勞働せざる分子を社會に送り出すことをしない。又勞働階級の如く其の日の生活に餘れば惜けて了ふといふともない。適當に勞働の意味を理解して居るのである。此點からいふても中産階級の保護は一大問題であるのである。

第五章 中産階級の振張

一 中産階級と衣食階級

中産階級とは如何なる者か。經濟的中流なることは固よりであるが、此れは寧ろ外的條件であつて其の内的條件即本性的條件はカルチユアーに在る。精神が陶冶せられ文明的であり、道義的であり、社交的であり、精神的たる處に在る。此れには中産といふ外的條件を必要とする。細民階級となるといふと已に其の財産なく、又其の精神がない。富者階級になると五欲を縦ひまゝにして去勢せられて居る。又縦ひ財産は中流であつても只管に營利を事とし、社會維持の精神的事業に與らざるものは中産階級の中には入らない。商人の或る者の如き、農の或る者の如き是れである。此れ等は所謂衣食階級である。其の代

り商人中にも農民中にも矢張り中産階級の人を發見することが出来る。衣食階級は沈香も焚かず屁も放らざる者である。故に言はゞ社會の土壤の如きものである。即ち中性的である。恐るべき所はない。中産階級はカルチユアーを以て標徴とする。故に頼るべくして又恐るべきである。

此中産階級の中には名譽を得て満足して居るものもあり又或は富を得て満足して居るものもある。然るに満足しないところのものもある。斯の如き者は中産階級として常識もあり世界の大勢も知つて居るから其の鬱憤を晴らすが爲めに下層階級を煽動せんとする。是は通常の状態に於ても萬已むを得ないことである。何時の時代と雖も之れがないと云ふことは出来ない。斯の如き者が富豪に對して軋轢せんとして居るのである。故に貧富の争とは言ひながら中産階級

の一部と富豪との争である。労働者と資本主との争を貧富の争だと云ふけれども是は寧ろ小さい問題である。今日社會問題として最も憂ふべきところのものはそんな所にあるのではなく、中産階級と富豪との争である。中産階級其れ自身としては恐るゝに足らぬけれども、下層民を煽動するに於て恐るべき意味を有つて來るのである。中産階級は道德を維持し、大和魂を有つて居るけれども生活の壓迫がひどくなるると益此の方面に傾いて來るのである。社會の危機は茲に存在して居る。元來労働階級貧民階級などになると云ふと成金者流を偉いと思はぬともない。彼等は金を崇拜する丈けの弱點をもつて居る。けれども中産階級には之れがない。其の頼もしい處は此處に在る。

二 中産階級は中堅

歐羅巴に於て社會主義的運動の起り來つたのは、實に労働者保護て

ある。即ち主として労働者を保護するに止まるといふても宜い。社會問題と云ふと労働問題を聯想するやうになつて來た。英吉利に於るオーエンのなしたるところを見てても社會主義者のなしたるところを見てても皆之れに外ならぬ。獨逸に於てカールマルクスがやつたる所やラッセルの行つた所を見てても亦皆労働者を保護するに過ぎないのである。其の他佛蘭西に於ても伊太利に於ても労働者の保護と云ふことは十九世紀の初頭より一部の人士に由つて鼓吹せられ以て二十世紀の今日に及んで來たのである。それ故に社會問題と言へば直ちに労働問題を思ひ労働問題と言へば殆んど職工を保護することのみとなつて來た。其の議論中には一部の眞理もあるけれども其れ丈では困る。

今日貧富の懸隔と云ふことは我國に於ても著しく感ぜらるゝ。貧

富の懸隔を無くすると云ふことは勿論出來ないけれども自分の見るところに依れば労働問題は今日の儘にして進行させさへすれば宜い。其れよりも中産階級問題が大々急務である。中産階級の人々は其の財政の上よりも制限せられ富豪の如くに豪奢を縦まにすると云ふことは出來ないのである。又道徳上から言つても體面を維持しなければならぬのであるから、常に社會の不道徳的行爲に對しては眉を顰めて居る。道徳的に大部分墮落して居る労働階級と體面を重んずる爲には剛愎を縦まゝにして居る富豪とは共に以て國家を論ずるに足らぬのである。即ち中産階級は社會を維持する中堅となつて居るのである。

中産階級は即ち自守獨立の階級である。何等の保護なき所の階級である。此の故に中産階級の爲めに殊更に之れを保護するところの

社會力を作らなかつたならば中産階級も墮落してしまふかも知れない。是は社會問題として考ふべきことである。けれども今日の如く中産階級が生活難に迫られるといふと國家の前途が危ぶまれる。中産階級の元氣を鼓舞して中産階級の便利を圖るやうにしなければならぬ。否寧ろ今日の社會問題は中産階級を目標として作るべきものと思ふ。中産階級は勞働階級とは生活の状態が變つて居る。此の生活の變つて居るところで中産階級の道徳が維持されて居る。故に其の生活の變つて居るところに従つて之れに適應するやうな制度を設けてやらなければならぬのである。

中産階級は精神に於ては墮落しないのである。此の階級の増加すると云ふことは教育其の者の力であるが即ち國家を維持する最も堅實なる方法である。勞働階級は金を崇拜するの弱點を有つて居る。

けれども中産階級になると云ふと必ずしも金をば崇拜しない。故に成金の陋劣なるを見。斯くして貧富の懸隔の甚だしいのを見ると云ふと到底忍耐し切れなくなる。恐るべきは此點に在る。

三 中産階級と中産黨

中産階級の爲めを圖るには左の如きことが必要である。

一、中産階級は昔の武士の如く心得べきである。武士は農工商の手本であつて手本として恥ざる行爲をするやうにして居つたものである。今日に於ても中産階級なりと意識して居るものは此の心を持たなければならぬ。

二、中産階級は各々其の家庭に於て、日本の神を祭り朝夕之れに向つて禮拜し報本反始の意を表し合せて日本の生々主義と大和魂の由来を考へ神道の何なるかを默考することを要する。

三、華族會館に對し、諸所に俱樂部を作り此處に出入して以て相互の意志を交換することを努むべきである。其の俱樂部には矢張り中産階級として恥ざる一種の精神的意味を帯びしめることが必要である。

四、中産階級の食堂を作り俱樂部兼帯に使用することを必要とする。

五、中産階級の行動に對しては自分自身の責任であると思つて之れを導くやうに心掛くべきである。

六、中産階級は他人の世話になるとのない様にせなければならぬ殊に政府の厄介になるやうなことのないやうにすべきである。

七、中産階級は其の行儀態度に於て自ら衣食階級と異なるものがあるやうにすべきである。

八、政府は納税、恩典、公設市場、其他種々なる施設に於て中産階級を保護するやうに心掛くべきである。

九、中産階級は國家を双肩に擔ふことを意識し此の心掛を以て平生社會に處さなければならぬ。

一〇、中産階級は其の經濟を維持せんには購買組合を組織し、或は公共農園、公共牧場の類を作るべきである。

一一、中産階級は一代風尚の先驅者たることを自覺すべきである。

一二、中産階級はカルチュアを以て其の標徴とする故不斷之れに注意せねばならぬ。

其の他澤山あるけれども今暫く之を略す。中産階級は社會自然の階級として此階級の勢力を發揮することに努め、政治的にも一黨を組織すべきである。農民黨、商工黨の如き各々其の範圍の利益を主張す

る所から見れば何れもあつて良いものであるが、國家の安危に關する根本問題から見れば當然中産黨の成立を必要とする。

四 中産階級生活の改善

又茲に新たに注文せなければならぬことがある。それは何んであるかと云ふと中産階級の人々が自己の収入に適當したる生活をなすと云ふこと之れである。見えを張らぬやうにせよ。金のある者は奢つてよいが。金のない者は質素にせよ。自分は嘗て或る貴族院議員と同車した。知名の士である。正午頃になると車中の人は何れも上等の辨當を取つたり、食堂に這入つたりする。其の人は一片の麵麩を懷より取り出した。殊更に副食物がある譯でもない。ジャムがある譯でもない。只少しばかり砂糖を紙に包んだのがある。吝嗇と言へばそれ迄であるけれども自己の生活に適したる物を取ると云ふ所に

は甚だ氣高いところがある。私は甚だ感服した。彼れは彼れ吾れは吾れ。各々其の分を守ると云ふ觀念が極めて強いのである。此の風潮が出来て來ないと云ふと生活問題が益紛糾する。友人と一緒に食ひに行つても彼れと吾れと収入が違つて居れば同じに奢る必要はない。客が來ても自分で行つて御馳走になつた時と同じに奮發するには及ばない。又反對にそれ以下にする必要もない。場合に依つてはそれ以上に遣らなければならぬこともある。兎に角収入と相當したる生活をするに云ふことが必要で是は總ての方面に亘つてさうでなければならぬ。衣食住皆然り。彼れは彼れ吾れは吾れ。其の分を守ると云ふ習慣が社會問題の上から考へても大に必要なことである。

五 中産階級と輿論

自分は十年前、或る政黨の首領に會して、所謂民黨が政府を攻撃する

ことは何等影響のないものであらうと云ふことを論じたことがあつた。首領がいふにはさうでない、大に影響のあるものである。民黨の言ふ通りになるものであると。自分は當時其のことを信じなかつた。何んとなれば、如何に民黨が騒いても政府が全權を掌握して居る以上政府の意見に従はなければ何回でも議會を解散することが出来るのであるから政府には抵抗することは出来ない者だと思つて居つた。ところが其後の状態を見ると矢張り次第々々に輿論が勢力を得來つた。桂太郎が總理を辭職するに到つたのは一は燒打事件があつた爲めである。餘り人民が騒ぐ爲めに衷心安からざるものがあつて心細さを感じて辭したのである。實際若し政府の行ふところに一點の疚しいところがなかつたならば如何に人民が反對せんとしても構はずに行つて往くべきである。桂太郎の辭職する際の口實が面白い。餘

りの内閣が長く續くと人民が倦厭を來たすから閣下に罪を待つのであると。倦厭を來たすと云ふのは詰り輿論が之れを嫌ふといふのである。であるから輿論が大關係を持つて來ると云ふことは最も明瞭なことである。議會に於て多數を占めると云ふと輿論が何うだ斯うだと云ふけれども之れなどは極めて疑しい話である。議員を買収し一票の差を以ても輿論なりと言はんとするが如きは誠に困つたことである。けれども是は別である。社會一般の輿論は次第々々に勢力を得て來るものである。輿論の去就と云ふことは餘程影響を持つて來る。此の十年來最も著しくなつたやうに思はれる。社會の人も官僚などには割合に重きを置かなくなつて來た。官人は單なる官人に過ぎない。何等社會を指導するものでないと云ふことを自覺するやうになつて來た。眞に力あるものが社會から尊重されるやうに眞

に社會を指導する人が、即ち社會から尊重されるやうになつて來たのである。一般に輿論が勢力を得て來た。内閣が迭れば米が下る。物價が下ると云ふことは多少はあるかも知れないが内閣が人民の生活に大影響を及ぼすと云ふやうなことならば社會問題と云ふことは殆ど議論する丈の價値がないのである。貧富の懸隔は内閣の爲めに起つて來るものではない。特殊部落も内閣の爲に起つて來るものではない。歐洲大戦争にしてもカイゼル一人の爲めに起つて來たのではない。まして日本の内閣の爲めに起つて來たのではない。社會自然の現象として起つて來たのである。中産階級倒壊の如きも亦内閣の爲に起つたものでない。社會の根本問題と云ふことに就ては内閣は毫も關係しないのである。社會は輿論を知つて來た。而も此輿論を作成し、輿論を指導する所のものは實に中産階級であるのである。

六 中産階級と國教

我國には國教がない。神社は國教の意味を有たない。單に道德的の意味を有つて居る。是れは制度上の議論だが。實際に於ては神社も亦宗教的意味を有つて居ることは明かである。伊勢の大廟に參拜するは單に報本反始の意味ばかりではない。心に於て天照太神の加護を庶幾ふのである。此の考へがあつたところで差支へない。自然に其の考へが起るものとすれば殊更に防止する必要もないのである。故に國教と云ふものがない日本に於ては何を以て人心を指導するかと云ふと天祖の教に據る外はない。天祖の教と云ふのは何んであるかと云ふと即ち日本固有の神を拜み、日本固有の精神を發揮するに過ぎないのである。日本神道學の建設されたる曉には一樣に日本人たる根本意識に歸つて來る。即ち祖先を尊び天祖の御意志に従つて

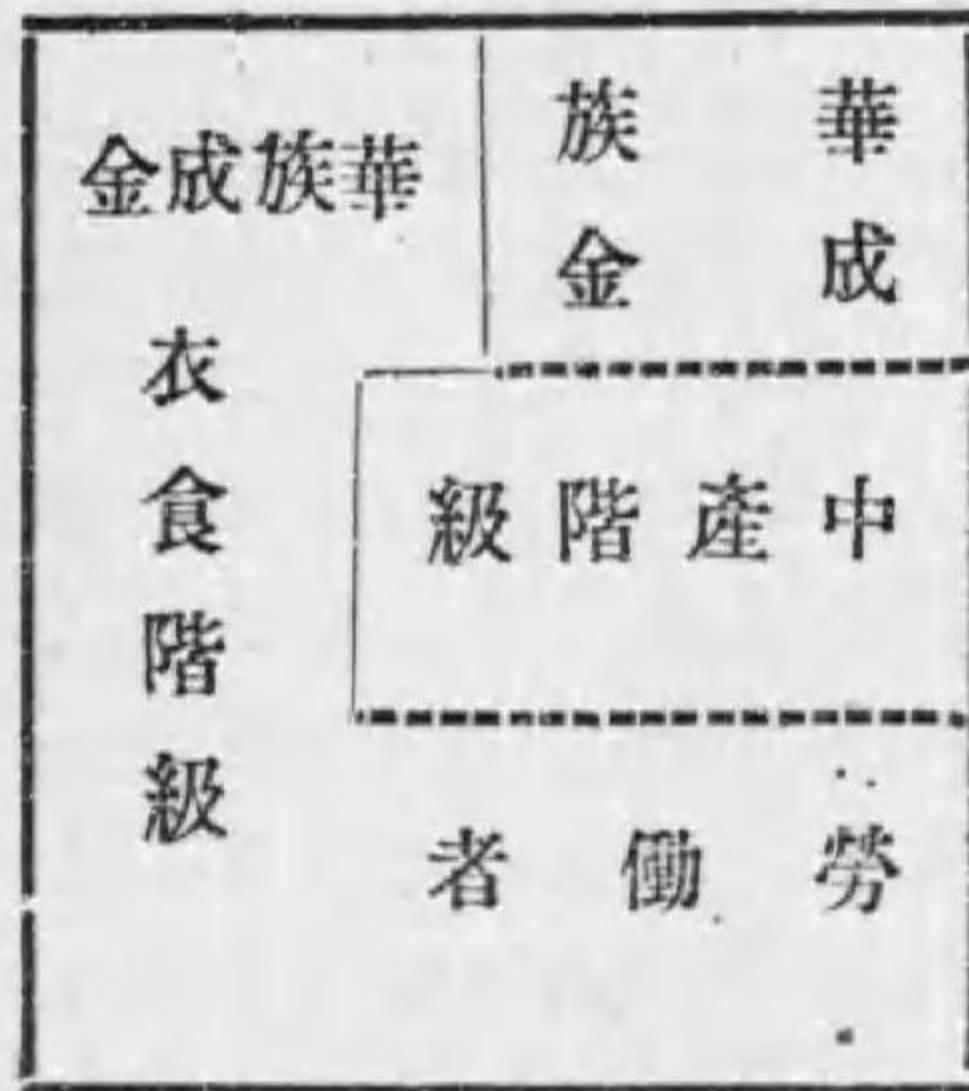
日本國家の隆盛ならんことを圖ると云ふことに於て一致するに違ひない。總ての宗教は何れも日本の文明を助くるものである。言はゞ滋養分である。故に如何なる宗教を信ずるとも毛頭差支へないけれども其の根柢に於ては日本のためである。日本人として腹の据ゑ所は此處に在る。日本神道學の建設は此の意味より言つて最も必要なことである。而も是れ實に中産階級の任務である。

七 中産階級の精神普及

人間の教育は次第に變つて來た。十八世紀の手工時代に於ては徒弟と主人とは一つ場所に仕事をして居つた。徒弟は一家族の一人の如くてあつた。故に如何なる職業に於ても一家族を見聞して居るかから完全なる人間として教育されて居つたのである。ところが機械が發明されてより職工は單なる機械に過ぎなくなつて來た。極めて一

小部分の仕事より外は分らなくなつてしまつた。茲に於てか偏頗なる人間が到る處に出來てしまつたのである。機械の進歩は分業の進歩となり益其の傾向を強く示して居るのである。今日の日本に於ても亦之と同じく偏頗なる人間が續々發生しつゝあるのである。是は文明の進歩の上から已むを得ないこととは言ひながら人性を破壊し誠に困つた現象である。斯う云ふ時代に當つて人間を統一するところの原動力を何處に求めるか。中産階級の精神がそれである。即ち圓滿なる發達である。人間の幸福は何處から得らるゝかと云ふと總て人間が圓滿なる教育を受けて相互に思想の共通したる點があるからである。今日のところでは同じ汽車に乗つても職工と紳士とでは口をきいても面白くない。それでは困る。何か共通の勢力があつて、之れを結合して行かなければならぬ。故に今回の事件より考へても

貧富の懸隔の甚だしきを去り中産階級の精神的破壊を憂ひ進んで中産黨を組織し以て日本國民全體を結合したいと思ふ。換言すれば中産階級を中心として日本全體を結合するやうにしなければならぬことと思ふのである。



財産の程度

國體と中産黨 終

大正十二年八月二十五日印刷
大正十二年八月三十日發行

國體論 奥附

定價 金貳圓八拾錢



著者 遠藤隆吉

東京市神田區仲猿樂町一番地

發行者 波多野重太郎

東京市本郷區眞砂町三十六番地

印刷者 武居菊藏

發兌元 巖松堂書店
 東京市神田區仲猿樂町九段二二二五番
 電話二二二五番
 振替東京六五五六番

關西發賣所 巖松堂大阪店
 大坂市北區
 電話一六五三番
 振替大阪三一九七番
 巖松堂京都店
 京都府東山区
 電話一四五六番
 振替京都二四五四番

滿鮮發賣所
 大坂市北區
 電話一六五三番
 振替大阪三一九七番
 巖松堂京都店
 京都府東山区
 電話一四五六番
 振替京都二四五四番

KOKUTAI

THE FUNDAMENTAL CHARACTER OF JAPAN.

BY

R. ENDÔ.

TOKYO

SOYENGAISHA.

1923

CONTENTS.

	Page.
1. The word "Kokutai" and the Philosophy of Becoming.....	1
2. The Nationalities and the Idea of Becoming.....	5
3. The Clan System.....	17
4. The Perpetuity of the Family Line.....	25
5. The Abolition of the Clan System.....	28
6. The Absolute stability of the Imperial House.....	44
7. Japanese idea of the State as "res publica".....	48
8. Legal States and Moral States.....	53
9. Japanese Shogun versus Western Emperor or King.....	62
10. Japanese Morality and its isolation.....	73

"Kokutai" the Fundamental Character of Japan

1. The Word "Kokutai" and the Philosophy of Becoming.

In the English language there is no word corresponding to the Japanese word "Kokutai." "Kokutai" in its proper sense consists of the constitutional characteristics, manners and customs of a nation, but nowadays this word is used merely as a political or legal technical term, its English equivalent being policy and the "Kokutai" of a country is determined according to the status of the person or persons who are in possession of sovereignty:

if it is in the hand of a monarch that country is a monarchy, and if it is in the hand of a people, it is a republic. "Kokutai" which is a genetic term represents the characteristics of a nation. The same word which is mentioned in the famous Imperial Rescript on Education issued by the Emperor Meiji was translated into English "as the fundamental character of a nation." Character is made up of characteristics, and that loyalty and filial piety are the basis of morality is one of the characteristics of Japan; and cleanliness, thrift and love of nature are characteristics of her people. In like manner, love of freedom and equality are char-

acteristics of Americans, and "slow but sure policy" is a characteristic of the English. These characteristics constitute "Kokutai" by and by, this word which has such a broad meaning, is not a technical term used only in politics or law; and unless we bear this in mind, we can never understand straightly what "Kokutai" is.

Now let us examine what is the "Kokutai" of Japan. The fundamental idea underlying the "Kokutai" in Japan is the Law of Becoming. The Japanese believe that everything is in transition from being to nothing and from nothing to being, from life to death and from death to life. The

philosophy of Heraclitus and the "Eki" of China have the same principle. In their philosophic systems the universe is believed to be in constant flux. Such an idea is the basis of the "Kokutai" in Japan. Hence it follows that all things must be viewed in the light of that fact. For our customs and manners are, every one of them, founded on the said idea in the final analysis. Well, if there is one thing that requires very careful consideration it is the fundamental character of a nation; and if you want to know the truth about our national character, you must scrutinize these customs and manners in their bearing on this central idea.

2. The Nationalities and the Idea of Becoming.

(a) "Ancestor-Worship." This is a custom characteristic of the Japanese race. When one traces back one's own lineage from father to grandfather, from grandfather to great-grandfather, and so on, one finds there the indisputable fact of "becoming" (werden). So, to worship one's ancestors is to experience the becoming of them. I say this form of worship is best suited to our national character, but I do not mean to say that it is peculiar to the Japanese. Every race or nation in the

world has had this custom for some period of its history. Europeans also once used to worship their ancestors. But later there came to them Christianity with its monotheistic doctrine, and moreover some of them were forced, by various circumstances, to migrate from the lands of their fathers. Thus they embraced the Christian faith and discarded ancestor-worship. With us, this was not the case. From the beginning, the Land of Yamato has been the home of the Japanese race: our racial instinct has always incited us to keep the native soil of our ancestors. And even the cosmopolitan influence of Christianity failed to affect

this innate impulse. It is, then, only natural that the custom of ancestor-worship should have continued to exist among us to the present day. If, however, this is not enough to convince you of its suitability to the fundamental character of the nation, let us call attention to one important fact. It is this: that when the Buddhism was Japanized, it partook the nature of ancestor-worship.

Well, Buddhism is a religion. As such it does not differ from Christianity so far as the worship of an absolute, infinite being goes; and it does not expect its believers to deify their family ancestors. However, when it

was introduced into Japan, it took its colour from its new surroundings; not only was it unable to exterpate the native custom, but it assimilated itself to the latter. For ancestor-worship is in perfect unison with the idea of "becoming," inherent in our national mind, and refuses to be ejected by any foreign influence. In our country the Emperor worships his forefathers; the people worship those of their respective families; and since these latters were descendants of a common progenitor, they learn to worship this father of the race. Such is a trait of the fundamental character of the Japanese nation.

The Imperial Rescription on Education, on which is based the moral training of the people, attaches greatest importance to loyalty and filial piety. And ancestor-worship is the fountain-head of these virtues. Filial piety presupposes respect and love for one's forefathers; such respect and love are implicates of loyalty to the Emperor. In other words the motive of the two virtues are the motives of ancestor-worship. It is said by some that loyalty and filial piety require a new interpretation in our days; but if you would so interpret them, you must interpret ancestor-worship in a new light. With us, the latter is not a

religion ; we reverence our forefathers, not from religions, but from purely ethical motives. This is a peculiarity of the worship towards ancestors in Japan, which comes from the traditional idea of "becoming." As implied, this idea is the foundation of our emotional life. So we love our posterity as much as we respect our forefathers. In his book on "Japanese Patriotism," Mr. Stead has a happy expression. He says: "To the average Japanese, the past and the future are everything: the present is nothing to him." He seems to have a thorough grasp of our racial psychology.

(b) "Love of Nature." No other

peoples love nature so much as the Japanese. This feature has also been pointed out by our English critic. Every student of Japanese literature knows that it is very rich in poetical compositions singing the praise of Nature; which shows that we are a nature-loving people. We drink in the beauty of Nature; we absorb it, and we live in it. The love of nature occupies an important place in our emotional life. And the chief explanation for it lies in the idea of "becoming," which forms the basis of our way of looking at things. Nature does not cease to grow up; the growing has a peculiar charm for us Japanese.

For anything that grows we have a love: we love trees and shrubs because they grow. And we love life for the same reason. Death we detest because it is the reverse of life; and it is significant, that there has arisen among us a custom which requires the bereaved members of a family to observe the rite of purification. The Japanese finds expression for the nature also in the customary use of things "au naturel" as offerings to a god.

(c) "Simplicity, Plainness, Humanness, etc." Lovers of nature are necessarily lovers of simplicity, plainness, and unaffectedness. So we Japanese are plain-dealers; we hate artifices

and tricks. Being simple and unaffected, we deem it characteristically un-Japanese to stick to some purpose by fair means or foul. Critics may point out this lack of tenacity and tell us that it constitutes a weakness in our national character; but if we lack in tenacity of purpose, we are scrupulous about double-dealing. As Japanese cookery is plain compared with European one, so are the inmost feelings of the average Japanese in contrast to those of his Western brothers. The love of cleanliness may also be counted among his traits. To my thinking this is attributable to his love of nature, for everything that is born of nature is clean and pure. Another

trait of our national character is humaneness. In so saying I am well aware that this virtue is by no means peculiar to Japanese. Western peoples have it, too, of course. But in their case, humanity seems to have sprung up out of their dread feeling at the atrocities they committed themselves towards some inferior race. With us, however, it is a "natural" virtue. There is not a single instance of massacre in Japanese history; we have always showed compassion towards foreigners.

(d) "Japanese indisposed for state of Emotional Indifference." The Japanese, whose conception of life and the universe is based on the idea of "be-

coming," cannot view the phenomenal world with emotional indifference. In our philosophical literature, therefore, we have no equivalents of the teachings of Buddha or Lao-tsze on the extinction of individuality. In this respect we bear resemblance to the Westerner. Only we are more resolute; we do our best and leave the rest to Heaven. The Westerner has a strong will, though he is comparatively indecisive. This feature of his we notice in the character of Napoleon and ex-Kaiser Wilhelm II.

It is not impossible that one may get cut loose from the earthly ties through resolution; this is one of the reasons for which Buddhism was able to har-

monize itself with the Japanese people. Somehow the fundamental character of the nation is not disposed to such emotional indifference. We enjoy life and grieve death; we are too much attached to the world to take the Buddhist view of it. Therefore, our rites and rituals are jovial and enlivening.

(e) "Conclusion." The fundamental character of a nation is an expression of a central idea that controls its inner life. Without this central idea, no nation can possess a fundamental character, which distinguishes it from others. For this reason the fundamental character of the Japanese nation ought to be considered from a philosophical point of

view. And I argue that every student of the Japanese should not lose sight of the fact that their central idea is that of "becoming." Then, what position is Japan, with such fundamental character, to occupy in the world? What course is she to take in her dealings with other nations?

3. The Clan System.

The clan system is a stage of social evolution through which every civilized society has passed. In this system the clan was almost the only unit of human life. It was a body of people descended from a common ancestor. Some clans were maternal and others paternal.

Whether maternal or paternal, marriages were made between different clans. In the case of a maternal one, men of a different clan came in to live together with their mates, (wives,) so that when a strife should arise between such clans, it might cause such people to quarrel among themselves. This circumstance constituted a weakness in the union of a maternal clan. On the other hand, men belonging to a paternal clan took to wife women of another one, but made them their possessions. Therefore it was very cohesive as a unit. Most of the civilized nations of to-day are extensions of a paternal form of clan system.

The clan system in Japan was an externalization of the racial belief in "becoming." Japanese mythology shows that. Clans in other countries developed individually, while those in Japan were branches of one eminent clan. In the beginning of the world there was Ame-no Minakanushi-no-Kami, who begot Kuni-tokotachi-no-Mikoto; Kuni-tokotachi-no-Mikoto begot Izanagi-no-Mikoto and Izanami-no-Mikoto. From the last two were descended the Japanese people, so the tradition goes; therefore all the clans were considered as members of one vast family. Of course this is a fictitious narrative, but it must be said that the story is based on the

idea of "becoming." History tells us that Koreans and Chinese immigrated into this country in large numbers down to the Nara Epoch, when about one seventh of our population was foreign-born. So it is clear that all the clans were not descendants from the same ancestor; and yet all of them were controlled by the common idea of "becoming," so that they were at unity with one another as if they had been kinsfolk. To say, therefore, that the Japanese nation is one great family is correct, not factually, but psychologically. The consciousness that "we are Japanese" coexists with the idea "we have a common ancestor." As said, this

idea was fostered chiefly by the racial feeling (belief) in "becoming." But the existence of some old families, the genesis of which dates back more than twenty centuries, is another factor contributing to the formation of the national consciousness. The fact that the lineage of "the Senge family of Izumo" goes back into the Age of the Gods disables one from doubting indiscriminately those narratives handed down by tradition from prehistoric times. The founder of the Imperial House (family) was "Jimmu Tenno," whose ancestry can be traced several generations further back. And in the space of more than 30 centuries that have elapsed since the dawn of

Japanese history many a prince of the Blood has descended to the status of subject and founded a family. When we consider these facts we cannot but feel that our nation is one vast family and that we have a common ancestor. The idea of racial unity forms an essential part of our national consciousness. And if you carefully study the clan system, you will bring to light truths about the form of government in ancient Japan. But the latter is not our present subject; let us confine ourselves to matters concerning the fundamental character of the country.

“The Imperial House (Family), the Central Clan.” The Emperor has had

no clan-name, and yet his family was a clan all the same. It was made an object of worship by all the other clans, for it was considered as the nucleus of the people. This was a special feature of the Japanese clan system, which is the foundation of the national organization of modern Japan. And herein lies the wisdom of studying the fundamental character of the nation in the light of the historical development of its clan system.

History is a fact. The feelings and sentiments of an individual are only the consequence of his history; so are the feelings and sentiments of a nation. An individual with a career marked by

vicissitudes will remain comparatively unruffled at a sudden juncture ; a nation with a variety of experiences is ready to take proper measures in case of emergency. Yes, such nation may be able to profit by it, instead of bringing calamities on itself through thoughtlessness. Self-preservation is an instinctive desire of a nation as well as individual. Well, such desire can hardly be resisted, for it is the consequence of the historical existence of an individual or a nation. To do a thing contrary to history is to do a thing not congenial to the individual or nation. So every nation attaches great importance to its own history. For instance, England

makes much of her common law ; America, her constitution, which was established when she attained her independence. With Russia or China, revolutions are not incongruous in the light of their history. The French people have sometimes had an emperor and at others a republican form of government. That is because they lack the historical foundations of monarchism. Therefore the value of history consists in its facts. The value of the facts is the value of mental motives behind them. Every fact in the society must find its *raison d'être* in its history.

4. The Perpetuity of the Family Line.

From the idea of becoming has spr-

ung the idea of the perpetuity of the family line. This idea is a direct outcome of the clan system since there is no difference between the clan and the family in ancient times. Under the clan system, ancestry and genealogy are considered very important and a small and a great family alike have a genealogy of their own, according to which their position is determined, and a family which has the most noble progenitor is considered noblest. In Japan the Imperial Family being the centre of the nation, all other families are considered to have descended from it, and it is for this reason that the people pay the greatest respect and homage to the

Imperial Family. The perpetuity of the family line is, no doubt, an accompaniment of the clan system. Every nation had once in its career, a clan system, and yet it is not every nation that has a family which is the centre of all the families: this is because they lack the fundamental idea which is called the Law of Becoming. On the contrary, in Japan such an idea exists, and in consequence thereof all the families have sprung from the Imperial Family: this is at least what the people thought to be the most appropriate way of explaining the position of the Imperial Family. Consequently, the idea of a perpetual line has left the most profound

impression upon the Japanese and it has grown to be an established dogma. The Law of becoming has thus assisted the family system in creating the idea of an unbroken family line, and under this system the relation of Emperor and subject has grown similar to that of father and son.

5. The Abolition of the Clan system.

Now, at this moment, let us quote one section of Japanese history.

“Not for these things, however, but sweeping reforms in the administration of the empire is the reign of Kotoku memorable. Prince Naka and Kamatari, during the long period of their

intimate intercourse prior to the deed of blood in the great hall of audience, had fully matured their estimates of the Sui and Tang civilization as revealed in documents and information carried to Japan by priests, literati and students, who, since the establishment of Buddhism, had paid many visits to China. They appreciated that the system prevailing in their own country from time immemorial had developed abuses which were sapping the strength of the nation, and in sweeping the Soga from the path to the throne, their ambition had been to gain an eminence from which the new civilization might be authoritatively proclaimed.

Speaking broadly, their main objects were to abolish the system of hereditary office-holders; to differentiate aristocratic from official ranks; to bring the whole mass of the people into direct subjection to the throne, and to establish the Imperial right of ownership in all the land throughout the Empire. What these changes signified and with what tact and wisdom the reformers proceeded, will be clearly understood as the story unfolds itself. Spectacular effect was enlisted as the first ally. A coronation ceremony of unprecedented magnificence took place. High officials, girt with golden quivers, stood on either side of the dais forming the

throne, and all the great functionaries—omi, muraji, and miyatsuko—together with representatives of the 180 hereditary corporations (be) filed past, making obeisance. The title of “Empress Dowager” was conferred for the first time on Kogyoku, who had abdicated; Prince Naka was made Prince Imperial; the head of the great uji of Abe was nominated Minister of the Left (sa-daijin); Kurayamada, of the Soga-uji, who had shared the dangers of the conspiracy against Emishi and Iruka, became Minister of the Right (u-daijin), and Kamatari himself received the post of Minister of the Interior (nai-daijin), being invested with the right to be con-

sulted on all matters whether of *starcraft* or of official personnel.

These designations, "Minister of the Left," "Minister of the Right," and "Minister of the Interior," were new in Japan. Hitherto, there had been "oh-omi" and "oh-muraji," who stood between the throne and the two great classes of "uji," the "oh-omi" and the "oh-muraji" receiving instruction direct from the sovereign, and two classes of "uji" acknowledging no control except that of "the oh-omi" and the "oh-muraji." But whereas the personal status of Kurayamada was only "omi" (not "oh-omi"), and the personal status of Kamatari, only muraji (not

"oh-muraji), neither was required, in his new capacity, to take instructions from any save the Emperor, nor did any one of the three high dignitaries nomially represent this or that congeries of "uji." A simultaneous innovation was the appointment of a Buddhist priest, Bin, and a literatus, Kuramaro, to be "National Doctors." These men had spent some years at the Tang Court in China and were well versed in Chinese systems.....in the presence of the Emperor, the Empress Dowager, and the Prince Imperial, to pronounce, in names of the Kami of heaven and the Kami of earth — the Tenshin and the Chigi — a solemn imprecation on rulers

who attempted double-hearted methods of government, and on vassals guilty of treachery in the service of their sovereign. This amounted to a formal denunciation of the Soga as well as a pledge on the part of the new Emperor. The Chinese method of reckoning time by year-periods was then adopted, and the year A. D. 645 became the first of the Taika era. But before proceeding to really radical innovations, two further precautions were taken. In order to display reverence for the foundations of the State, the sovereign publicly declared that "the empire should be ruled by following the footsteps of the Emperors of antiquity," and in order to win the

sympathy of the lower orders, his Majesty directed that inquiry should be made as to the best method of alleviating the hardships of forced labour. Further, a solemn ceremony of Shinto was held by way of preface.

Then the reformers commenced their work in earnest. Governors (kokushi) were appointed to all the eastern provinces. These officials were not a wholly novel institution. It has been shown that they existed previously to the Taika era, but in a fitful and uncertain way, whereas, under the system now adopted, they became an integral part of the administrative machinery. That meant that the gover-

nment of the provinces, instead of being administered by hereditary officials, altogether irrespective of their competence, was entrusted for a fixed term to men chosen on account of special aptitude. The eastern provinces were selected for inaugurating this experiment, because their distance from the capital rendered the change less conspicuous. Moreover, the appointments were given, as far as possible, to the former "miyatsuko" or "mikotomochi." An ordinance was now issued for placing a petition-box in the Court and hanging a bell near it. The box was intended to serve as a receptacle for complaints and representations. Anyone had

a right to present such documents. They were to be collected and conveyed to the Emperor every morning, and if a reply was tardy, the bell was to be struck.

Side by side with these measures for bettering the people's lot, precautions against any danger of disturbance were adopted by taking all weapons of war out of the hands of private individuals storing them in arsenals specially constructed on waste lands. Then followed a measure which seems to have been greatly needed. It has been already explained that a non-inconsiderable element of the population was composed of slaves and that these consisted of

two main classes, namely, aborigines or Koreans taken prisoners in war, and members of an "uji" whose "Kami" had been implicated in crime. As time passed, there resulted from intercourse between these slaves and their owners a number of persons whose status was confused, parents asserting the manumission of their children and masters insisting on the permanence of the bond. To correct these complications the whole nation was now divided into freemen (ryomin) and bondmen (senmin), and a law was enacted that since among slaves no marriage tie was officially recognized, a child of mixed parentage must always be regarded as a bondman. On that

basis a census was ordered to be taken, and in it were included not only the people of all classes, but also the area of cultivated land throughout the empire.

At the same time stringent regulations were enacted for the control and guidance of the provincial governors. They were to take counsel with the people in dividing the profits of agriculture. They were not to act as judges in criminal cases or to accept bribes from suitors in civil ones; their staff, when visiting the capital, was strictly limited, and the use of public-service horses as well as the consumption of State provisions was unless they were travelling on public business. Finally, they were

enjoined to investigate carefully all claims to titles and all alleged rights of land tenure. The next step was the most drastic and far-reaching of all."

The East and West have alike experienced the clan system. In the case of the West, it ceased to exist much sooner than in Japan owing to migration and other circumstances; with us, however, it died a natural death, so to speak. When the Emperor Khotoku reorganized the national constitution in the second year of Taika (646 A. D.), the change dealt a great blow with the clan system. It was abolished as a political institution, but as a social one it survived the reformation. There are

two circumstances that account for its survival. "First," the Imperial family was the nucleus of the clan system; "second," the patriarchs of the local clans were able to support their clansmen with the hereditary pensions they received.

In our ancient nomenclature, "Oh-omi" and "Oh-muraji" were titles of honour, not the names of offices. Both "Omi" and "muraji" were "Kabane," or reverential names. And yet in ancient times, state affairs were administered by the holders of the titles "Oh-muraji." It was these men of good lineage that gave their advice to the Emperor and assumed the reigns of

government. Thus social positions were identified with political ones. The Reformation of Taika suddenly changed this system. In consequence, the lands and people that belonged to the patriarchs were delivered to the Emperor. The clan-heads now had no political affairs to attend to, and their power was greatly diminished. They were politically ousted by those officials appointed by the central government, who came to rule these lands and people in the name of the Emperor. Under the circumstances the patriarchs must have felt great displeasure. In order to appease them, the government gave them the nominal control of such offici-

als. This temporary policy is hardly worth mentioning, except of its implication that the clan system had lost its political significance. But as a social institutions it continued to exist. To the head of a clan was accorded the same amount of reverence as "choja" or an "ujinokami." Under him were "ujiko" or "the clan-fellows." The custom of worshipping the "Uji-gami" the Clan-god continued still after the Reformation. And the fact that the words "ujiko" and "shizoku" are found in our present-day vocabulary goes a long way to show how deeply the system took the root in the national spirit. Therefore it would be impos-

sible for us to understand the national constitution of Japan if we put the clan system out of consideration.

6. The Absolute stability of the Imperial House.

In spite of the fact that the clan system had lost its political significance, the Imperial House, which was itself a clan, remained a political factor as before. How was it so? We can easily see from our history (1) that the Imperial family was generally considered as ~~the~~ central motive power of the nation, and (2) that the Emperor was, as he has been not only the patriarch of a clan but also the ruler of the

country. In ancient times people firmly believed that the Emperor was a descendant in a direct line from the creator of the Japanese land, and he was called the "akitsu-migami," or the "god of this world." This belief is handed down to us by tradition, so that our loyalty to the Emperor comes from a profound sense of gratitude.

The patriarch of a clan ruled the land and people which was considered as a private possession inherited from his forefathers. For this reason his relationship to his land and people was different from that of an official to those subject to his government. A feudal lord had much more intimate relations

with his province and subjects than such officials as the prefectural governor of to-day, and yet a feudal lord was not the possessor of them in a strictly patriarchal sense. Those local executives newly appointed after the abolishment of the clan system in the Taika Period were expected to govern, not to own, their respective province and its inhabitants. But the Emperor was already reigning over the country and people, so that his position could not have been affected by the Reformation of Taika, which had done away the political system of the patriarchs. I wish to call the attention of the reader to this point, for here is a key to the

Japanese system of government.

Not all the Japanese people had a common ancestor with the Emperor; not all the people were members of clans. The clans were composed of natives of good family. Roman law has it that "plebs gentes non habet"; and this principle seems to apply to our clan system. In the Tokugawa Period most of those who belonged to the agricultural, industrial and mercantile classes had no family names. However, as a result of domiciliations, every Japanese, native or naturalized, became clansmanlike in spirit. The idea "I am a Japanese, and as such can claim a collateral connection with the Imperial

family" found its way into the head of every Japanese; our tradition regarding the creation and the lineal descent of the Emperor from the gods was instrumental in fostering that idea. And none of us could entirely get rid of it. Such is another trait of the fundamental character of Japan.

**7. Japanese idea of the State
as "res publica."**

The Chinese adage has it; "Under the heavens is there no land which is not the Imperial domain; within the four seas is there no one who is not an Imperial subject." This saying does not throw much light upon the public

nature of the State. With us, however, the distinction between public and private is very clear on this point. From ancient times, the State was considered as public thing, and the word "ohmitakara," or "the public people" was used in government documents.

Out of too much reverence to Mikado, some Japanese scholars will not recognize this distinction, and their views are apt to impair the dignity of the Emperor. For instance, Fujimoto-Magane, in his "Kokoku Dai-ichigi," says that this Empire is a private property of the Emperor, for it was created by his first ancestor. But then

why were the people called the "ohmitakara," or the public people? To consider them as a private property of the Emperor is contrary to the fundamental character of the country. The "Tenno" reigns over Japan by general and objective standards. In case, there are the constitution and laws he pays a regard for them; if, however, there are none, he abides by the general principles of justice and humanity. Wanting such standards, the relationship of the Emperor and the people would become that of a master and a slave. The difference between the rule of right and the rule of might depends upon the rigidity of these standards.

He who rules by might is more liable to treat his people as if they were a private property than he who rules by right. The Japanese Emperor considers the country and people as a sacred trust from the heaven. This is the reason why he is held sacred by the Japanese Constitution and why his personality borders upon divinity in the eyes of every Japanese.

Be it remembered, however, that those standards the Emperor goes by are by no means special to him, but applicable to all men alike. So it is impossible that he can have any self-interest in the exercising of his rulership. In the chronological list our

sovereigns had never deviated from these standards. They are not like ordinary men in authority, who are apt to let self-interest interfere with its exercise. So they are the standard of the people. This is one of the salient features of the fundamental character of Japan; herein also lies the source of Japanese morality. From ancient times we have held the State as a "res publica." We have seen that this view of ours is based on the idea of "becoming," and that the foundation of our national constitution is the clan-system.

8. Legal States and Moral States*

A state where such relation as in Japan exists between sovereignty and people may be called a Moral State. Some critics classified states under two heads, namely, political and legal; but it should not be overlooked that in addition to these there also exists Moral State. Japan is neither a political nor a Legal State, but a Moral State; the relation between the Emperor and his subjects being moral, his sovereignty is based on morality, and therefore, so long as morality exists in Japan the sovereignty of her Emperor will endure, just as a father

would be able to control his son so long as his son's respect for him endures. In ancient Greece Moral States were also in existence; for instance, Athens was one of them, and it is in conformity with the Law of Nature that every state should be thus established. In China, however, there never has been in existence any such state, the relation of her Emperor and subjects being that of usurper and usurped, and the people were always trying to overthrow their ruler. This characteristic is not limited to China, being common to all political states; for instance, the ancestor of the Hohenzollerns of Germany was a

count who by political cunning and artifice became the King of Prussia, and eventually his offspring became the Emperor of Germany. The Romanoff family, sometimes the reigning dynasty of Russia, was not reigning dynasty from the beginning, but by trick and treachery and by war and conquest their ancestor managed to become Emperor of Russia; and therefore, to the people they were—no matter whether they called themselves Emperor or Kings usurpers and conquerors who ruled them with an iron hand, and however beneficial their administration might have appeared, it was merely a trick to deceive their dissatisfied people,

such a phenomenon is characteristic of political state. On the contrary Japan is to all intents and purposes a Moral State; and this being the most prominent feature of this country, if it were lost sight of, it would be impossible to understand her.

This being so, I feel called upon to explain a little more about the "Koku-tai" of Japan. The Japanese have always and under every circumstance had a supreme regard for humanity, and never in the history of Japan, was a foreigner ill treated, and if there was an incident which occurred in modern times it was merely an imitation of the achievements of the European Powers

who boast of their culture and morality. Inhuman acts are committed mostly by one nation upon another whose culture is immoderately inferior to his own, or who belongs to a race diametrically different from that to which it belongs. But Japan being an insular country isolated from the world outside, has had no occasion to maltreat people belonging to other countries, and consequently she has been prevented from displaying her inhuman spirit if she had any. That has made her one of the most hospitable nations in the world, and she welcomes foreign guests with open arms. On the contrary, some nations emigrating from land to land

dread and hate other people of a different race and were often inclined to slaughter them as if they were wild beasts; and from the reaction of this has sprung what we now call humanity. Viewed in such a light it is only natural that the Japanese should seldom talk of humanity. They have their weakness perhaps, in that they are narrow minded. A Japanese apple is smaller than a European one, its taste is by no means inferior to the latter, the difference between a Japanese and a European is not unlike the difference between the apples. The Japanese being born on an island and having had little intercourse with the outer

world, are naturally self-contained, and consequently they have had little opportunity of putting to the test their principles of humanity in regard to foreigners,—this is a great pity, I think. For instance, Japanese passengers enjoy themselves alone without carrying on conversation with any one they meet—this is what the Japanese differ from foreigners.

The Emperors of Japan in ruling over the country have never regarded their people as their private property. In the ancient language of Japan we find such word as "Ushihaku" and "Shirasu," the former means "To treat people as though they were the private

property of a sovereign," and the latter means "To rule over a people." It is the tradition of Japan that the Emperor rules over his people and that he never treats them as if they were his private property. This idea has been in existence from time immemorial, and it is worthy of special note. This shows that in ancient time the Japanese had the highest regard for righteousness and humanity, and so long as the Japanese uphold this noble idea handed down by their forefathers they will be able to stand as a world people.

For the reason stated above I think it is not necessary for the Japanese to adopt the "democracy" of the West.

What they are required to do is merely to maintain their traditional spirit. The Japanese being still novices in statecraft of the West, it is dangerous for them to adopt democracy, just as a rustic who eats European food is apt to get sick. As has been pointed out over and over again, the Japanese have their traditional spirit, and by sticking to it, they can compete with the Westerners. Democratism is now sweeping over the world, and it is so powerful that any one who resists it is destined to be ruined, Germany being a good example of it. Yet Japan who has magnificent ideas of her own, need not adopt this Western thought, inasmuch as in her

“Kokutai,” are embodied the principles of democracy, and it will have better results by far if her people are educated in compliance with her traditional ideas.

9. Japanese Shogun versus Western Emperor or King.

The Japanese counterpart of the Western Monarch is the Shogun. The equivalence of the two is often denied on the ground that the title “Shogun” was granted by the Emperor; but this is a mistake. If a King is one who has become the head of a people by dint of force, the Japanese “Shogun” corresponds to the King of the

West. Ashikaga-Yoshiaki, one of the Ashikaga Shoguns was called the King of Japan by a Chinese monarch of the Ming Dynasty. Again our Toyotomi-Hideyoshi was entitled the same. Out of reverence for the Imperial court, no one used such title in Japan, but the Shogun was a King “de facto.” Some Shoguns presumed upon their position and went the length of exiling or dethroning the Emperor, though few have ever attempted to usurp the throne. None of the Shoguns, with all their mighty power, were so audacious. And what conclusion are we to draw from this fact? To my thinking, it shows that Japan is not a state based on

military force. The Japanese people will not yield to such force. When our fathers recognized the Shoguns as rulers "de facto," it was because the latter had the supreme authority delegated by the Emperor. Then why do we pay homage to him? Because he is traditionally the patriarch of one vast family comprising all the classes in Japan.

Upon this tradition is founded our national constitution. And it cannot easily be destroyed. The Westerners have no such tradition: with them, the most powerful one becomes a monarch and a monarch who has lost his power is supplanted by some one else. Though

it is erroneous to think that Japan is a country specially favoured by Heaven, yet you must acknowledge this great difference between Japanese and Western tradition.

I think the most salient feature of our national constitution lies in this tradition. If so, Japan is essentially a country where no tyranny could exist. For tyranny means force. We acknowledge the authority of the Emperor, not because we are enforced obedience on ourselves but because we deem it right to have him over us. Our allegiance to him comes from our free will, not from compulsion. One obeys one's parents, because it is right to do so,

not because the latter is superior to one in physical strength. The same is the case with us when we obey our Emperor. And this is the reason why the Shogun who was supreme in military power acknowledged the Imperial authority. Therefore it is clear that the Japanese state is based on morality, and a moral state pays a regard for the freedom of conscience of its people. In Japan no one exercises his arbitrary will over others: into its social and political system may be introduced whatever conforms to justice and humanity. Japan is nor the Japan of the capitalists; nor is it the Japan of the aristocracy. With us, it is not neces-

sary to pay regard to the will of any one at the sacrifice of justice and humanity. Herein lies the strong point of a moral state. A certain Japanese historian writes: "The founders of our Empire took the policy of militarism" However, this has reference to the fact that the founders of the Japanese State had to subjugate the savages. Surely our historian did not mean to say that the first Emperors employed military power in enforcing allegiance on the people. The relationship of the Emperor and the people has been ethical ever since the establishment of the Empire. You must know this before you can understand Japan and the